

【2024年度のWWL&三菱みらい育成財団 教育プログラムの総集編】

本校では、「WWL」「三菱みらい育成財団」の教育プログラムとして、様々な教育活動に取り組んでいます。令和6年度（2024年度）の実施内容のうち、特筆すべき取組について、「Super-Innovative Report 2024」と題し、生徒の感想と共に掲載します。本校生徒の輝きに満ちた成長の軌跡を、ご覧いただけましたら幸いです。

1 国際会議への参加

1 CIF (クリティカル・イシューズ・フォーラム：核兵器廃絶に向けた国際会議)

令和6年4月5日（金）、6日（土）、アメリカのカリフォルニア州ミドルベリー国際大学院モントレイ校ジェームズ・マーティン不拡散研究所主催の『CIF (クリティカル・イシューズ・フォーラム：核兵器廃絶に向けた国際会議)』に、日本の公立高校として唯一の招聘を受け、代表生徒として高校3年生の松本航弥が現地にて参加しました。本会議にはアメリカから9校、日本から本校を含め5校が参加。計30名の高校生が協議しました。

松本は「核軍縮へ向けた平和教育のアプローチ」と題した研究成果を発表し、会議の成功に積極的に貢献。その姿勢が評価され、学校優秀賞を獲得しました。日米の高校生が平和を志向し多様な意見を交わす、大きな成長の機会となりました。

2 Nagasaki Peace-Preneur Forum (ヤング・ダボス会議)、中満泉国連事務次長との対話会

令和6年5月11日（土）、12日（日）、One Young World 主催の長崎版ヤング・ダボス会議である、「Nagasaki Peace-Preneur Forum」に招聘を受け、高校3年生の藤崎紫苑、山本幹太、久保宏平、坂元あゆ子、高田大義、松尾桃花、増田理裕の生徒7名が参加。本校は長崎県の高校として唯一の参加となりました。

「Peace-Preneur」とは“平和起業家”を意味し、創造力のある新しい知見で平和を構築するイノベーターを指します。会議には、20か国150人以上、10～30代の世界で活躍するイノベーターが集結し、「Beyond GDP」「Technology for Wellbeing」

「Citizen Empower」「Hummanity Needs Us」「For Dialogue」「Social Media for Peace」の各テーマに分かれ、協議を行いました。

また、本会議の来賓であった中満泉国連事務次長と、本校生徒の対話会を実施しました。対話会には、長崎県教育長の前川謙介様、長崎大学名誉教授の溝田勉様も参加されました。

中満様は、生徒の質疑応答に丁寧にお答えくださいました。国際平和の実現に邁進する中満様のお言葉から発せられるメッセージを体感し、生徒たちは感銘を受けていました。これからの未来社会を創る青年たちに、勇気と希望を湧き起こす、最高の時間となりました。

下記、生徒の感想レポートのを紹介します。



↑中満泉事務次長との対話会

【生きる力、世界を動かせる力 高3 山本 幹太】

午前の部では、「Beyond GDP」のテーマに参加した。バイオチャーを活用して、食料廃棄物から作られた土壌で新しい食料を育てるエコシステムを構築し、それをういた自動販売機を作るというアイデアを考えた。経済成長と環

境配慮が両立できる方法になることを意識した。午後の部では、「Technology for Wellbeing」のテーマに参加した。若者のいじめ問題に着目し、いじめられている生徒は先生や親、スクールカウンセラー等に相談することを恥ずかしく思う傾向がある現状を踏まえ、AI と人間の専門家のハイブリッドスタイルで問題解決に取り組むアプリケーションの開発を提案した。AI がまず問題の原因を分析し、その後専門家が対応することで、人間の負担を減らすと同時に、専門家の事前準備がしやすくなるためより生徒に寄り添った相談・解決が可能であると提案した。

今回の感想として、2つのことを述べようと思う。1つ目は人間の「生きる力」は偉大だと感じ、そして問題を人間中心に考えることの必要さが分かったということである。国連事務次長の中満泉様に紛争の最前線でつらいこともあるなか、どのように乗り越えたか、原動力は何だったかお尋ねしたところ、人間の「生きる力」だとおっしゃった。また、トークセッションに出演された諸藤周平様は、彼自身の人生の中で、挫折して苦しんでいたことを、起業を通じて、苦しいことも学びととらえるようマインドセットを入れ替えて乗り越えたとおっしゃっており、人間の「生きる力」の偉大さを感じた。そして軍縮、核兵器廃絶などいかなる問題も人間のためにあるため、人間を中心に問題を考えることの重要性を学んだ。

2つ目は私たちには本当に世界を動かすことのできる力があるということを感じたことだ。私はこのフォーラムに参加する前まで、世界平和に貢献したいとは思いつつも、心の中のどこかで高校生だから結局は無力なのだろうと思ってしまっていた。しかしこのフォーラムに参加して、世界中の「世の中を変えたい」と野望をもち、さらに一部の人には行動に移してまわっている人々とワークショップで話し合ったり考えを聞いたりする中で、様々な人との関わりが生まれ、自分たちにも出来る、全然不可能・無力ではないということを痛感した。

最後に、私の将来の夢は、国際的に活躍する企業に入って、国の間の公正公平な取引の一翼を担うことである。この夢を実現するために、大学では国際政策や企業法、国際経済学などを学んで、グローバルに活躍できる素養や論理的思考を身につけたいと考えている。

【Peace-Preneur として必要な力 高3 増田 理裕】

今回の議論のテーマであったAIについて。with コロナの時代から with AI の時代に変貌した世の中では、AI の利用方法について物議を醸し、多くの注目を浴びるようになった。特に安全保障分野においては戦術そのものに大きな変化をもたらした。単に世界平和を希求するだけでなく、“AI を倫理的に運用するためにどうすれば良いか” という難題に対する解決策が、今回のフォーラムでは求められていたと感じる。



↑イノベーターとの真剣な議論

ガザ侵攻ではイスラエル軍がAI兵器を運用しているとの話がある。

ガザ住民の顔を全てAIに学習させ、ハマス戦闘員と思われる人の顔を自動識別し、イスラエル軍人に通知、殺傷するかの判断を求めるといふ。殺傷はドローンによって行われているらしい。AI が顔を認識しハマス戦闘員の可能性があるかと兵士に通知し、兵士が殺害命令を下すまでに最短20秒との報告もある。

AIはどんどん戦争に投入され、戦地ではAI兵器の試験場と化している。人を殺す道具として開発されるまでの時間は一瞬なのに、レギュレーションを行うまでには膨大な時間がかかる。その間に多くの人が亡くなっていく。特に民間人が犠牲になることは非常に心苦しい。本国際会議では、どうにかしたいのにすぐに解決できない焦燥感に駆られた。

次に、協議テーマの一つwell-beingについて。このトピックには驚きが多かったし、自分の人生に直接作用することだと思う。“人のためにやって得られる自身の幸福状態は蓄積である”という考え方は今まで自分になかった。今まで自分が幸福かどうかなんて気にしたことはなかった。ある事象が起きた瞬間に“嬉しい”“悲しい”の感情が湧いても、長期目線で自身のメンタルについて考えたことはなかった。感情というのは自己の解釈次第で自分の味方につけることも可能なのだと感じた。

また、“辛いことは学びであると割り切ること。時間の概念によって予測不可能な事象に対しては仕方ないと、学びだと思ふべき。予測可能な辛い事象はできるだけ避けること”という考え方も人生の楽しさに直結していると思う。事前に回避・防止できない辛いことは、ダラダラ引きずらずに切り替えることが必要だ。

感情は自分の都合の良いように解釈することで味方につけることもできる。この発見は生き方を変えようと思う。

最後に、人と人との繋がりの重要性について大きな学びになった。中満泉国連事務次長が一貫しておっしゃっていたことは、対話の重要性である。AI と違い人間には感情がある。気持ちを感じることができる。この人間の特徴を生かして、信じて、対話による平和的な解決が最も良い。

他者と競争することが人間の性であり、生物学的に生き残ってきた戦略であるとしても、対話を通じて解決してほしい。この能力があるから、私たちは政治に絶望するのではなく、解決策を探し続けなければならない。Peacepreneurとして心に留めておかなければならない。

一番印象に残ったことは、”コミュニケーションは相手の立場で相手の意見を聞くことから始まる。対話は前段階にあるコミュニケーションの上に成り立つものであり、聞き入れたくない意見を受け入れる受容力が必要だ”ということだ。これまでの探究学習・Nagasaki Peacepreneur Forumで一貫して学んだことは「どれだけ自分ごととして捉えられるか、思考できるか」である。

【勇気をもって挑戦することの価値 高3 松尾 桃花】

「私は、今回参加したなかで、講演された来賓のジャマイカ駐日大使リチャーズ様の言葉が特に心に残った。『意欲ある人と出会い繋がるのが重要である』という言葉である。私は、将来の夢ややりたいことの“質（現時点でどれだけ具体的で深いか）”はきっかけがあるかどうかではないかと思った。なぜなら私はこの二日間で確実に大きく考え方や価値観、将来への希望が変化したからだ。

一歩踏み出した勇気は、世界的な問題の解決のために意欲的に行動を起こす数々のイノベーターや、活動的な多くの外国人大学生との出会いにつながった。彼らとの出会いは非常に刺激的で、ワークショップでの自己紹介では、各々が普段取り組んでいることや達成したことの内容が、私たちとほぼ同年代と思えないものばかりだった。

今回このフォーラムへの参加希望者として手を挙げることは私にとっては全く簡単なことではなかったし、代表選考面接の直前まで辞退しようかとずっと悩んでいたくらいとても怖かった。それは“自分は優秀ではないから” “きっと自分より頭の良い人がやる方がいい” “自分には専門知識がないから” と考えてしまっていたからで、もし自分の他にもこのように考えている人がいるなら、そのような考えは今すぐにでも捨てて勇気をもって挑戦してほしいと伝えたい。

誰しも自分の興味のない分野の知識が少ないのは当たり前だ。しかし、短期間であっても、今回のような機会に向けて知識を取り込んだり調べたりすることは、必ず自分の知識として身に付くし、成長につながるだけでなく、これまで目を向けていなかった分野や将来の道が開けるきっかけにもなりうるということを改めて感じた。

私自身、平和活動や平和教育については以前から興味はあったけれど、世界各地の紛争の現状や一人ひとりの個人の幸福については考えていなかったし、実際に社会問題やSDGsの達成に向けて自分はどう行動していくかについて向き合う機会も少なかったが、実際に行動している人たちに出会えてとても有意義な経験になった。

私はこのフォーラムを通して自分が思っていた100倍大きなものを得られたし、上記に述べたように多くのことを学ぶことができたので、本当に参加してよかったと心から思っている。

これから先もたくさん訪れるチャンスは自分から掴みにいき、他者とコミュニケーションをとる機会があったら、積極的に自分から話しかけ、自分の意欲を見せていくことで繋がりを広げていきたい。



↑ 挑戦する勇気を体現

【世界は変えられる 高3 藤崎 紫苑】

2日間で学ぶことがすごく多かった。主に3つにまとめた。

1つめに、自分にとって、これからの将来を考える点でものすごく大きな経験となった。これまでは、ただ漠然と国際政治に関する進路に進もう、という方向性があるだけだった。参加した後、具体的なキャリアが思いついたわけではないが、どのようにして国際政治の中で対立が解決されているのかという実情を学べたおかげで、よりよく将来を見通すことができるようになったと思う。



↑代表に選ばれ解決策を発表

国際政治はものすごく遠い存在で、どのようにしたら関わっていくことができるのか全く分からないような気分だったが、今回様々な方々と話したり、Talk session を聴いたりするなかで、とにかく問題意識をもって、がつがつ取り組むことが大切だと学べたのが大きかった。世界を変えられるかもしれない、思えたということだと思う。

2つめに、日本の選挙の投票率について、他の人がどう考えているのか知ることができたことが収穫だった。同じように投票率の低さについて危機感を抱いている人と話すことができてうれしかった。ジャマイカの駐日大使、リチャーズさんが仰っていた、投票しないことが、先人たちの権利獲得のための努力をある種忘れてしまっているようで、やるせない怒りを感じてしまうという考えには、ものすごく共感した。

最後に、ものすごくぼやっとした言い方になるが、世界に希望が持てた。こんなにすごい人たちがいて、問題解決のために真剣に向き合っているのなら、今の問題が簡単ではないだろうが、解決が不可能なものではないと思えたからだ。それに問題が山積みとはいえ、イノベーションが社会をよりよくするためにどんどん起こっていることを知れたからだ。社会はめまぐるしく進化していて、むしろ人間が進化に置いて行かれてしまっているような気がしてくる現状に、半ば絶望してしまうこともあったが、前向きに現状を改善しようとする人々や技術に感動して、なんだか応援されたような気さえて、ものすごくうれしかった。とにかく、終始ものすごく感動しました。

【ともによき世を創るために 高3 高田 大義】

午前の部では、「beyond GDP」のテーマに取り組んだ。緊急時に必要な情報や正しい情報が手に入りやすく、日本だと防災放送するとき日本語しか話さず外国人にとって厳しいという課題について、チームで解決策を探究した。アプリ（名前：miramira）を開発して災害や戦争が起きたときに緊急時用のWi-Fiを使って、必要な情報（避難所や多言語対応）を発信する。また、GPSも使うことによってその人が最終的にどこにいたかもわかるようにする。最初は日本でそこから世界に広げていくというアイデアを共創した。

午後の部では、「Social Media」のテーマに取り組んだ。誹謗中傷によって苦しんでいる人がいるにもかかわらず、日本の法整備が進んでいないという課題について探究した。子どもたちへの教育を推進する。また、ソーシャルメディアで法整備のことについて発信し、みんなへ理解を拡げる。そして、日本の法改正までつなげる。また、これは日本に限ったことではなく世界的な課題になるので、国際法としての在り方も検討すべきであるという結論に至った。

この2日間を通して本当にたくさんのことを学んだし、貴重な体験をさせてもらった。改めて英語のことについて考えた。英語は、国が違って文化が違って価値観が違って、お互いを理解するため、つまり「対話」するための一つのツールだと認識した。自分が伝えきれないこと、英語ができない人の意見を英語にして伝えている参加者の姿はとてよかった。自分も、自分の主張だけでなく他人の主張を手助けして伝えることができるような人材になりたいと思った。また、相手の意見を尊重するということについて学んだ。今までの自分は、相手の意見を尊重するということに、自分と意見が合わなくても批判せず黙っておくことが大切だと考えていた。しかし、ディスカッションで自分が主張したとき「その意見いいね！」と言われた時とても嬉しかった。つまり、本当の意味で相手の意見を尊重するということはその意見を「褒める」ことだと感じた。これから先、多様な考え方と直面したとき、相手の意見を尊重しつつ、「それでも自分はこう考えるな」と自分の意見も主張していくことが大切だと考えた。

今回のフォーラムで、常に話題に上がっていたのは「イノベーション」と「対話」である。「イノベーション」に関しては、AI などの科学技術や、グローバル化の促進など世界がとても速く変化している中、自分も新しくなっていくべきだと感じた。確かに、文化や自分の信念など、受け継いでいくべきものや変わらなくてもいいものはそのままでもいいと思う。しかし、そのままとこの世の中の流れにのまれ、自分や自分の守りたいものも守れなくなると感じた。また、「対話」に関してはお互いのことを知るとても有効な方法だと感じた。正直、ニュースなどを見ているときに「対話だけで解決するはずない」と若干否定的に見ていた。しかし、「対話」することによって相手のことを知り、共通理解できるところを探していくことが「平和」な世の中にするための第一歩だと考えた。



↑中満事務次長も協議に参加

改めて今回、大変貴重な経験をさせてもらった。しかし、それは学校の先生方やスタッフの方々など、多くの人のおかげであり、感謝を決して忘れない。これから先も、社会課題に興味を持ち続け、さらにそれを解決できるように動けるような人材になっていきたい。ともによき世を創るために。そのため、今自分が何をできるかを考え、行動していきたい。

【多くの観点からの平和 高3 坂元 あゆ子】

「Social media for peace」のテーマに取り組んだ。私たちのチームは、「#Oneminutesilencefor89」というアイデアを考えた。長崎に原爆が投下された8月9日の11時2分から3分にかけての1分間、SNSを使わずに黙祷あるいは平和について考える時間を取ろう、というキャンペーンを行うというものである。ハッシュタグ「#Oneminutesilencefor89」を用いて、11時2分の前後にSNS上で拡散する。

私は今まで長崎で平和活動をしてきた経験から、「核兵器の廃絶」という観点から平和について考えることが多かった。しかし、今回のフォーラムで経済、SNS、テクノロジーなど、核だけではない新たな視点から平和を学ぶことができ、今後の活動に大いに生かせる点が多数あったように思う。また、既にアクションを起こしている各国の若者たちと関わる中で、自分自身も何かアクションを起こしてみたいと感じさせられることが多々あったので、この出会いをこれからの原動力として大事にしていきたい。

私個人で考えると、今回のフォーラムは、協議について課題が見つかることが多かった。英語力の必要性を感じたことも大きい。普段の学校生活の中ではなかなかできない経験をしたことによって、また一つ成長できたと感じられた。最後に、このフォーラムに参加した若者すべてがこの社会の未来であり、ともに良き世をつくる仲間である。そのことを忘れず、今の自分にできること、これからの自分にできることを常に考えながら歩んでいきたいと思う。

【グローバル人材の資質とは 高3 久保 宏平】

午前の部では「For Dialogue」というテーマに参加した。このセクションでは、異なる考えをもつ者同士の対話を促す方法について議論した。まず初めに行われた識者によるパネルディスカッションで、対話には「相手に敬意を示すこと」「主語を『私』から『あなた』に変えること」、そして「主体的になること」の三要素が大事だと教わった。議論のなかで、リンガーハットのハワイ支店に勤務している参加者の方が、対話を阻む要素として偏見・ステレオタイプ・変えられない歴史の3つを挙げた。

偏見やステレオタイプは無意識的に持っているものであり、排除するには人間をカテゴリーで見るのではなく、個人で見ることが大事であるとの話になった。歴史に関しては、国や個人によって解釈が異なるので、意味づけをせずに事実としてとらえることが大切だと思った。また知り得たことを次の世代に継承することも大切である。

このような対話を阻む要素を取り除く方法として、私たちはハード面とソフト面のアプローチを提案した。ハード面として挙げたのは、国際法の整備や外交努力である。ソフト面として挙げたのは、異文化交流や留学などの私たちが日常的にできることである。日韓関係が悪くても、日本で K-POP が流行っているように、草の根レベルのつな

かりがあれば、人々の間での誤解が解けていくということだ。
「世界レベルでの対話の促進」という大きな目標のためにも、
まずは異文化を知ることや世界の歴史を学ぶこと。そして、
より多く海外経験を積んでいきたい。

午後の部では「Social Media for Peace」というテーマに参加した。このセッションでは、SNSの平和利用について議論した。私たちの班では、SNSを安全に、そして健康に利用することの大切さについて議論した。ここでいう

“健康に”とは、互いに傷つけあうことなく、そして自分が傷つくことなくSNSを利用することを指す。フィリピンから

来た留学生の、“Right or Wrong”ではなく“True or False”で判断することや、ネット記事にファクトチェックをかけることが大事であるという意見が印象的だった。私が、学校でのSNS教育が遅れているのではないかと指摘すると、論題が「SNSに関する生徒と教員の相互教育システムの構築」になり、議論が活発になった。私は、生徒が教員にSNSの活用方法を授業し、教員は生徒にメディアリテラシーを教えるという案を提案した。紙文化が根強く浸透している日本はAIやSNSに関しては他国に比べてかなり遅れを取っている。中満国連事務次長のお話にもあったが、これからはAIやSNSとともに共存し、人間中心の世界を作る時代である。技術に利用されるのではなく、技術を利用する人間になれるように、積極的にかつ健康にAIやSNSに関わっていききたいと思う。

今回の国際会議は今まで経験してきたものとは異なり、使用言語は英語だった。英語に関しては、内容が理解できなかったところもあったが、困る場面は少なかったように思える。だが、まだ使える語彙や表現が限られているため、自分が言いたいことを言えなかったり、相手が意図していることをくみ取れなかったりする場面が多かったため、この悔しさをバネに英語の勉強に取り組んでいきたい。しかし、英語はあくまでツールにしかならない。中身が伴って初めて、自分が持つ英語力の効果が発揮されると、この会議に参加して改めてそう思った。

AIやSNSについての言説は、たいてい否定的なものであり、私もAIやSNSを恐ろしいものだと思い込み、避けてきた。今回の会議で参加者が口をそろえて言うのはAIやSNSを避けて通れない時代になってきているということだ。だが、健康上の問題やシンギュラリティといった心配がある。なので、中満国連事務次長がおっしゃっていた通り、「技術に左右されない、人間中心の世界の構築」が急務になっている。技術に左右されずに、技術を利用できる人に成長していきたい。

改めてグローバル人材に必要な素養を考えた。私は、端的に言えば、「理想に向かって努力し、他人に希望を届けること」だと思う。私が、会議で対話してきた人の多くは長崎や日本、世界の第一線で活躍されている方々である。

彼らは、未熟な私たち高校生に対して、対等にそして明るくふるまってくれた。そして、素人である私の発言に対しても、頭ごなしに否定することなく耳を傾け、前向きなアドバイスをしてくれた。どうしてもネガティブになってしまいがちな今だからこそ、前向きに努力し続ける力が必要になってくると思うし、そんな他者を見て理想を抱いて努力する人が出てくると思う。

この2日間は、自分の人生を大きく変えてくれたものでした。今回一緒に参加してくれた仲間や先生方、そしてこのような素晴らしい機会を与えてくださった事務局の方には感謝してもしきれません。この経験を糧にして、これから頑張っていくとともに、参加できなかった友人にも、得た学びを自分の行動や言動で示していきたいと思いました。

本当にありがとうございました。



↑中満事務次長との質疑応答



↑友情を拡げた世界の友とともに。

2 国内外フィールドワークの実施

本校では、探究活動の深化をはかるため、高1・2全生徒が長崎市内を中心にフィールドワークを行っています。令和2年度の三菱みらい育成財団「心のエンジンを駆動する教育プログラム」以降、350以上の企業や官公庁、大学・高校、NPOと協働の輪を広げてきました。

さらに生徒たちの探究的な学びを深めるため、選抜された生徒を対象に、**国内外を舞台に特別な探究フィールドワークを実施**しています。今年度よりその地域・規模を拡大し、参加できる人数を増やしました。下記がその一覧になります。

【R6年度 選抜 国内外フィールドワーク一覧】

	研修地	期日・日数	人数	主な研修内容
1	ベトナム	10/28~11/2 3泊5日	高2 5名	・長大熱帯医学研究所ベトナム拠点、JICA ベトナムでの研修 ※11/17グローバルシンポジウムにて研修内容を報告
2	ニューヨーク	3/2~7 4泊6日	高2 1名	・国連軍縮部での探究発表、グラウンドゼロ、エリス島研修 ・広島市立舟入高と合同実施
3	ハワイ	3/25~30 4泊6日	高2 2名	・真珠湾研修、移民インタビュー、伝統農業体験 ・連携校（ULS）交流、ハワイ大学研修
4	広島①	8/4~5 1泊2日	高2 2名	・広島ピースフォーラム（広島女学院主催）参加 ・伝承者講話、被爆遺構フィールドワーク
5	広島②	8/5~7 2泊3日	高2 5名	・舟入高校との「高校生平和共同宣言」合同発表 ・被爆者講話、遺構フィールドワーク ※8/9 長崎でも実施
6	沖縄	10/10~13 3泊4日	高1・2 5名	・遺骨収集ボランティア体験、ひめゆり学徒隊研修 ・高校生交流（那覇国際・沖縄尚学）、米軍兵士インタビュー
7	東京①	10/23~24 1泊2日	高2・3 5名	・東京大学大学院情報学環（デジタル活用の平和教育） ・広島市立舟入高と合同実施
8	東京②	12/12~13 1泊2日	高2 7名	・国連大学教授陣への探究発表、キャンパスツアー ・アジア開発銀行研修、外国人留学生交流

今年度の参加生徒総数は32名。（昨年度13名）探究活動の中核である高校2年生を主な対象として、審査会を行い選抜して実施しました。いずれの研修も、生徒主体の取組として、高度で深い学びを体験する貴重な機会となりました。これまで実施した各研修の概要について、生徒の感想とともに紹介します。

※ニューヨーク、ハワイについては今年度3月に実施予定（本レポート記載時R7.1.31）

1 **ベトナムフィールドワーク**

令和6年10月28日（月）～11月2日（土）、本校主催の「ベトナムフィールドワーク」に、高2の岩本悠愛、村川梨羽、森下咲来、安田圭吾、中島聖奈が参加しました。本フィールドワークは、医療系の探究を行っているメンバーを中心に選抜し、長崎大学熱帯医学研究所ベトナム拠点、JICA ベトナムと連携し、「感染症」をテーマに実施しました。その概要を、生徒の感想をもとに掲載します。

【人間的に成長できた研修 高2 中島 聖奈】

ベトナムフィールドワークの概要ですが、まず初日は、ホーチミン廟やタンロン遺跡、一柱寺などを訪問しハノイの歴史を学びました。2日目はJICA事務所で国際開発事業の説明や、下水処理場の見学と処理過程について学びました。3日目は、長崎大学熱帯医学研究所ベトナム拠点にて拠点長の長谷部太先生によるコウモリフィールド研究や、阿部遥先生のガボン共和国でのフィールド調査、樋泉道子先生による出生コホート研究の講義、研究員Nga先

生による河川水質調査を行いました。最終日は、前日に培養した細菌のコロニーを数え、野内英樹先生によるHIVと結核感染者数の研究の講義を受けました。

私がまずベトナムで発見したことは、家庭ごみの処理が日本に比べ適切に処理されていないことです。日本では分別方法や収集日が決められていますが、現地ではあらゆるところにゴミがそのまま山積みされていました。

ベトナムではデング熱など蚊の媒介による感染症が深刻ですが、降雨後、放置されていたゴミに水がたまり、蚊が繁殖しやすい環境が整ってしまっているのではないかと感じました。他にもネットで調べても感じることでできないベトナムの実際の様子を自分の目で確かめ体感することができ良い経験となりました。

今回ベトナムフィールドワークで、もっとも大きな学びになったことは、「自分をアピールすることの大切さ」です。私は中学校の時、オーストラリアに短期留学したことがあり、そのときは、これらの素敵な機会や出会いが一生の宝物だと感じましたが、今回の研修でお世話になった長崎大学熱帯医学研究所ベトナム拠点の長谷部太拠点長の「一期一会を大事にするだけではなく、自分をアピールし相手に覚えてもらうことがもっと大切」という言葉が

とても腑に落ちました。何分かの出会いが自分の人生を大きく変えることがあることを知り、私もこれからのたくさんの素敵な出会いや繋がりを無駄にしないよう、自分の夢や目標を語ることでできる人間になろうと思います。

今回のフィールドワークでは、ベトナムの人々の温かさや前を向く姿勢に触れ、同じアジアでもこんなに違うのだと良い刺激を受ける素晴らしい経験となりました。これからも、自らコンフォートゾーンを抜け出して様々なことに挑戦し、可能性を広げていきます。最後に、海外も視野に活躍する夢を与えてくださった先生方、長崎東同窓会奨学会にお礼を申し上げたいと思います。誠にありがとうございました。



↑ベトナムのゴミ捨て場



↑河川水質調査の様子

【出会いの大切さを知ることができた研修 高2 森下 咲来】

私は特に、2日目のJICAでの研修が印象に残りました。JICAという機関があることは、中学生の頃に学校の授業で教わったことがあったけれど、今回のJICAでの講義を通して、本当に大まかなことしか知らなかったのだと感じました。JICAベトナムでは、ベトナムのため、日本のため、世界のために活動をしています。今回研修お世話になった土本周様の、「日本もかつては被援助国だったため、今は日本が恩返しをする番、日本って良い国だな、と思ってもらえるよう活動をしている」というお話に感銘を受けました。



↑JICAベトナムでの特別講義

3、4日目の長崎大学熱帯医学研究所での講義では、特に阿部遥先生のお話にとっても興味を持ちました。研究者の中には、研究室で研究を行うのとフィールド研究を行うという2パターンの種類があることを初めて知りました。私は研究と聞くと実験室で研究をするイメージが大きかったのでフィールド研究というものがあることに驚きました。また、感染症の一番恐ろしいことは感染症が発生した時に何も知らないことだということが心に残りました。確かに、日本に住んでいる私たちには、インフルエンザなど、知っていて当たり前でかかる感染症にかかることが多いのであまり恐怖心をもつことはありません。しかし、ベトナムなどの熱帯の地域ではさまざまな感染症が起こります。その感染症について何も知らないと、その感染症に感染するとどのような症状が出るのか、また治療の方法も何

もわかりません。阿部先生はそのような感染症を予防するために調査、研究が重要になるとおっしゃっていました。また実験では、ベトナムの河川水を培養し、大腸菌や薬剤耐性菌がどれくらいいるのかを調べました。実験では初めて見た実験器具を使用し、将来薬剤師が目標である私にとってとてもいい経験になりました。

私は、このベトナムフィールドワークを通して、出会いの大切さを学びました。長崎大学熱帯医学研究所の長谷部拠点長が、「出会うだけでなく、出会った人に自分のことを話して相手に自分を覚えてもらうことが大切だ」とおっしゃっていました。私は人見知りで初対面の人に自分から話しかけることが得意ではないのですが、このお話を聞いて、自分から積極的に話して人との出会いを大切にしたいと感じました。最後に、研修の機会を与えていただいた長崎東同窓会奨学会に心より感謝いたします。

【大勢の人の努力を感じた研修 高2 村川 梨羽】

今回の研修における最大の学びは、風疹についてです。ベトナムの風疹（発熱、発疹とリンパ節の腫れを特徴とするウイルス性疾患）のワクチン接種率は昔に比べると高くなっているのですが、大きな流行は起きていないものの、妊婦の28.9%は風疹に感受性で、風疹発生数が0になるのは難しい状況であるということです。このことからまだベトナムにも医療や経済資源の限られた地域と都市では、大きな医療格差があることを実感しました。

妊婦が罹患すると風疹ウイルスが胎児に及び、CRS（先天性風疹症候群）と呼ばれる障害を引き起こします。CRS 児には主に白内障、難聴、先天性心疾患の症状がみられ、生後半年までに死亡する可能性が高いです。日本でも風疹ワクチン接種ができていない世代があります。風疹はワクチンで防ぐことができるので、一人でも多くの方がワクチン接種に協力してくれるよう、今回の研修で学んだ私たちは、日本とベトナムでの現状を把握し、少しでも広めていきたいと思いました。私たちは今後、研修の報告や探究を行っていきますが、感染症で脅かされているベトナムの方たちが格差なく健康に暮らすために、その取組が少しでもその一助になれば、と思いました。

JICA や長崎大学熱帯医学研究所ベトナム拠点など、今回の研修で携わった大勢の方々が「ベトナムを変えたい！」と強い気持ちで社会課題について熱心に取り組む姿をみて、私たちが帰国してから、学んだことは探究活動を通して多くの人に一生懸命私たちなりに伝えていきたいと強く思いました。

また、今回の研修で私は積極性が高まりました。研修中は自分が気になったことをその場で質問していました。帰国後の日常生活でも、自ら進んで物事に取り組んだりすることが多くなりました。積極性を持つことで多くの人に自分の学びや考えをアピールし、知ってもらうことはとても大切だと思いました。

私には、将来助産師になりたいという夢があり、フィールドワークでもベトナムや世界の保健医療について詳しく学ぶことができたので、行って終わりではなくこの経験をしっかりと生かし、夢の実現に向けてこれからも努力していきます。実際に現地に行くまで分からないこともたくさんあったので、今回ベトナムに行くことができて本当に良かったです。最後に、研修の機会を与えていただいた長崎東同窓会奨学会に心より感謝いたします。



↑ 熱帯医学研究所ベトナム拠点の皆様と共に

【ベトナムで学んだこと 高2 安田 圭吾】

私がベトナム研修で学んだことは、「助け合いの大切さ」と「コミュニケーションの大切さ」です。

「助け合いの大切さ」については、2日目のJICA ベトナムでの土本様から学んだことです。JICA の仕事内容に加えて JICA の理念や協力に対する考え方を学びました。JICA は大きく三つの形で協力体制をとっており、相手国の状況によって柔軟に対応されています。そして、私は医療格差についてのお話が心に残りました。私の夢は医師になり、医療格差を解消することであり、以前から医療格差に興味がありました。私は土本様より JICA の医療面で

の支援について重点的に話を伺いました。ベトナムには日本と同じように北部の山間部や中部の高原地方に医療格差が存在し、深刻な問題となっています。JICA では支援としてハノイの中央病院や地方の病院への支援、ハノイの中央病院を拠点とした遠隔医療の実施などを行っています。このような支援は自国や相手国のためだけでなく世界のために行っているということ、加えて、戦後、被援助国であった日本の恩返しという目的があったことを知り、感銘を受けました。JICA は日本の政府の政府開発援助の中核を担っている独立行政法人であり、国税を利用



↑ JICA ベトナムの土本様と共に

して援助を行っています。そのため日本の国益を考える必要がありますが、自国の利益のみを考えるのではなく、相手国や世界のために様々な形で支援を行っており、「助け合い」という考え方の基、援助が行われていることに、感動しました。

また、「コミュニケーションの大切さ」に関しては、3日目に訪れた長崎大学熱帯医学研究所ベトナム拠点にて長谷部拠点長から「五分間の立ち話から人生が変わる」というお話と、その後の経験からそのことを実感したため、改めてこの重要性について認識しました。私たちはベトナムから帰国後、長崎市にある出島メッセにて、長崎大学が主催する市民公開講座で今回の研修について発表の機会をいただきました。ベトナムでの経験や、得た学びについて発表を行いました。そしてその発表後、聴講して下さった“Results For Development” のObi 様にお声をかけていただき、名刺をいただきました。私たちの発表から、新しいご縁につながる事ができたのです。私は、今回のベトナムフィールドワークを通して、海外の方と話すことへの恐怖心も少なくなり、コミュニケーションの大切さを実感することができました。最後になりますが、研修の機会を与えていただいた長崎東同窓会奨学会に心より感謝いたします。

【新しい世界を知ることができた研修 高2 岩本 悠愛】

私がベトナム研修で一番印象に残ったことは、感染症研究にはフィールド調査が重要だということです。フィールド研究者が現地へ行き、未知なるウイルスについて調べ、研究することでその感染症の拡大を防ぐことができます。私は長崎大学熱帯医学研究所ベトナム拠点で阿部遥先生の講義を受けるまで、感染症研究は大学などの研究室で研究が完結すると思っていました。しかし実際はフィールド研究者が現地へ行き、発生した原因を究明したり、患者さんを診たりしてフィールド調査をしていることに驚きました。



↑ 阿部遥先生の特別講義

フィールド研究者はフィールド調査をするだけでなく、現地の方にトレーニングをして技術を教えたり、専門的な人材育成などの研究支援を行ったりしています。そしてこうした支援は国際協力の1つでもあります。またフィールド調査で訪れたガボン共和国についてもお話してくださいました。日本にいると経験しないようなことを先生は経験しており、私もいつか途上国に行き経験してみたいなと思いました。私は今回阿部先生や長谷部拠点長のお話を聞いて、将来途上国に研究者としてではないのですが看護師として行きたいと強く思いました。お二人が研究で訪れた国で起こった出来事や経験、研究活動をお話している姿がとても印象的でした。

私がベトナム研修で学んだことは思いを伝える大切さです。阿部先生が研究活動や医療支援活動を行っていたアフリカのガボン共和国の公用語はフランス語ですが、阿部先生はフランス語をあまり話すことができないそうです。

しかし伝えたいという熱い思いがあると現地の人はわかってくれたとおっしゃっていました。自分の思いを伝えることができるよう、何事にも情熱を思っ取り組んでいきたいと思います。

今回の研修では日本にいと学ぶことのできないようなことをたくさん学ぶことができました。様々な経験をした方々から聞いたお話はとても貴重で、自分の将来を考えるきっかけになりました。またベトナムの文化にも触れることができ、今まではなかった新しい考え方をすることもできました。

最後に研修の機会を与えていただいた長崎東同窓会奨学会に心より感謝いたします。今回の学びを将来の役に立てるとともに、友人や後輩にも還元報告を継続していくつもりです。本当にありがとうございました。

2 広島①フィールドワーク

令和6年8月3日（土）、4日（日）、「広島フィールドワーク」に、高2の安達桐子、安田優花が参加しました。本フィールドワークは、原爆資料館や原爆ドームなどのフィールドワークと伝承者講話を拝聴するとともに、広島女学院高校主催の「広島Peace Forum」（国際会議）に参加しました。

伝承者講話では原爆投下当日やその後について、高校生の手による絵画を示しながらお話いただき、広島における被爆の実相を学ぶことができました。また、広島Peace Forumでは、広島市立大学の沖村理史教授による講演の後、広島や大阪、ハワイの高校生とともにSDGsと平和について議論しました。下記、生徒の感想を記載します。

【感想 高2 安達 桐子】

今回フィールドワークで広島に二日間かけて参加しました。1日目の主な活動は、広島被爆地巡りを現地の被爆者の方によるガイドで行いました。広島記念館や原爆ドーム、平和公園や広島城に行き、当時の被爆した樹木や建物など現在いまだ残っているもの、記念碑や公園の造りに込められた思いなどを主に説明していただきました。

2日目は、広島女学院主催の国際平和会議に参加し、日本だけでなく海外の方々の戦争、平和な世界はどうすれば実現するのかについて、違う学校同士の人達と議論しました。

今回のフィールドワークを通して私は、多くのことを学びました。まず、平和公園に設立されていた朝鮮人の方々の慰霊碑と、仏教、キリスト教、イスラム教の三つの宗教が世界平和を祈っている、というお話が印象的でした。ただ亡くなった方々を追悼するだけでなく、これからの世界平和実現のために行っている、というその慰霊碑の背景についてお話いただき、実現への思いの強さを感じました。また、平和公園独特の造りである、平和の軸線も印象的でした。平和公園をどのように建設するか、どうすれば多くの人目に留まる建物になるか、その膨大な熱量がすべて公園に詰まっているように感じられました。

2日目の国際会議では、特に広島女学院の先生が紹介して下さった本が心に残りました。その本は『私を最後にするために』という本で、自身が体験した差別による性暴力、奴隷化の話が述べられている本でした。作者の少女は、つらい体験にも関わらず、自身のような被害者が出ないように、という願いが込められていると聞いて、過去ばかりでなく、未来の平和のために行動している彼女は本当に強いと思いました。また、会議でどうすれば世界平和は実現できるのか、ということに改めて問題の多さと解決の難しさを実感しました。今回学んだことを自身の探究に生かし、自分も過去を調べるだけでなく、将来の平和を実現するためにできることはないか、考えていこうと思いました。

3 広島②フィールドワーク

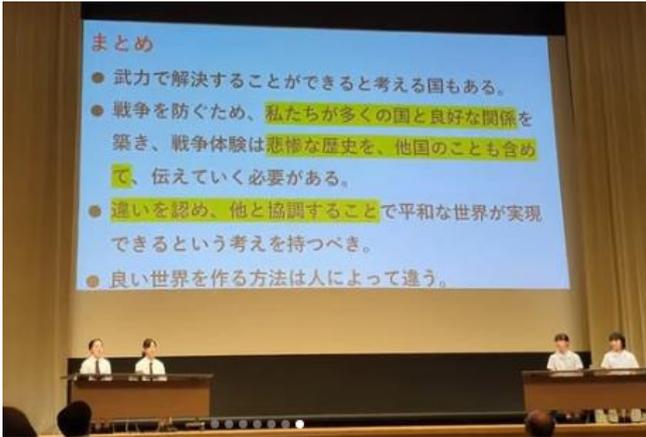
令和6年8月5日（月）～7日（水）には、小川凜子、北島末楓、西山奈那、松本愛望、李崎睿が、本校の連携校である広島市立舟入高校と平和交流を行いました。原爆投下日の8月6日には、両校が協働し作成した「高校生平和共同宣言」を、広島フェニックスホールで行われた「平和の日」記念式典において、合同発表を行いました。友情を深め、平和への決意を新たにす素晴らしい発表となりました。その後、「平和」をテーマにディスカッションを実施。参観者からも質疑応答が行われ、平和について活発な議論が行われました。また、舟入生徒の案内で被爆遺構を巡り、舟入高校の慰霊祭に参加、被爆者講話を賜り、原爆の実相について学びました。生徒の感想を記載します。

【感想 高2 西山 奈那】

私は、今回の広島FWに参加することができて本当に良かったと思っています。

今回、ディスカッションのパネリストとして参加することになりましたが、準備を進めるにつれて、パネリストで参加できて本当によかったと思いました。なぜなら、現在の問題や政治について学ぶきっかけができて、自身の未熟さを痛感することができたからです。「日本で戦争は起きるかどうか」「予測不可能な未来に対してどう行動すべきか」というこの2つの問いを考えるにあたり、インターネットを利用して調べ、自分なりにまとめました。

しかし、インターネットで少し調べただけでは出てこない私のまだ知らないことがたくさんあることを先生に原稿をチェックしていただいたことを通して知りました。また、問いに対して深く考え、自分の言葉で表現することがうまくできず、私にはパネリストは無理かも、と落ち込みました。しかし、それでも原稿が出来上がるまで寄り添ってくださった先生には感謝しかありません。本当にありがとうございました。



↑パネルディスカッションの様子

広島では、舟入生と直接会うことができ、いろいろなお話を聞くことができました。はじめは緊張して積極的にコミュニケーションをとることができませんでした。日を重ねるにつれて少しずつ話せるようになったので良かったです。舟入生だけでなく、先生方や広島にいた方々ともお話しすることができました。

記念式典の小学生の堂々としたスピーチや演劇部の演目を見て心が動かされ、発表に向けての思いやこれからの探究活動に対する思いが強まりました。

そして平和共同宣言の練習を見ていて、だんだん言葉に気持ちが乗ってきている様子を見て刺激を与えられました。本番はやはり緊張してしまい、100%の発表をすることはできませんでしたが、観客の皆さんに少しでも思いが伝わっていたらうれしいです。

また、舟入高校の生徒さんと資料館を一緒に見て回ることができて、そこで感じたことをその場で共有しあうことができ、いい経験になりました。被爆体験講話も実際にお話を聞くことができ、平和教育の探究を通してより多くの人に被爆者の思いを伝えたいと思うことができました。また、その後、長崎にも広島の高校生が来訪してくれて、共に交流することができ、とても貴重で濃厚な一週間になりました。このような機会を用意してくださって本当にありがとうございました。

このFWを通して、たくさんインプットすることができ、自分自身も少しは成長できたのではないかと思います。また、一緒に活動した東高生の仲間の積極性やコミュニケーション能力などそのすごさを感じることができ、刺激を与えられました。この一週間で学んだことを無駄にしないようにこれからの探究活動を積極的に行いたいです。コミュニケーションをしっかりとって、自分の思いもちゃんと伝えながら、探究活動を行えるように頑張ります。

【感想 高2 北島 未唄】

私は今回の広島フィールドワークを通して、様々なことを学び、得ることができました。これまで長崎のことについてはたくさん学んできてそれなりに知識を得てきており、広島のことについても長崎と共通しているところが多いだろうと、知っている部分が多いだろうと思いついていましたが、実際に学んでみると知らなかったことがたくさんありました。他県のことについては学ぶ機会がこれまでほとんどなく、まだまだ知らないことが多いことを実感したので、これからは他県のことについても視野を広げて学んでいきたいと思っています。

また、今回のフィールドワークの後に舟入の生徒が長崎を訪れてくれたのですが、その際は私たちが平和公園や資料館のガイドを行いました。事前に長崎のことについても改めて学び、忘れてしまっていた部分があることや今まで自分が考えもしなかったことを舟入の生徒に質問をされたことでそのことについて調べ、自分自身の学びにも繋が

りました。また、舟入の生徒との意見交換で、今まで自分にはなかった新たな視点や考えをもらえ、自分の考えの幅が広がりました。

準備の際に自分の勉強や部活の時間との両立で大変なこともありましたが、他県の生徒とこのように協力して何かを創り上げるというとても貴重な経験ができたことをとても誇りに思います。私たちの発表を見て「感動した」と言ってくださった方々がいて、自分にもできることがあるということを感じました。

戦争や平和についての知識を得られただけでなく、たくさんの人と出会い、交流の輪が広がったことが私の中で大きな喜びでした。同じ探究学習をしていく仲間でもあり、平和を切に願う同志でもあるかけがえのない友達ができたことは、このフィールドワークに参加して良かったと思う大きな理由になりました。

この経験を通して、更に平和な世の中になってほしいと願う気持ちが大きくなり、また自分たちが過去に起こった戦争を語り継ぎ、平和のバトンを繋げていかなければならないという使命を感じました。私たちは実際に戦争というものを経験したことも直接見たこともないため、被爆体験者の方々と同じように伝えても感情が上手くのせられなかったり伝わりにくかったりするので、私たちなりに伝え方を模索していかなければならないということに今更ながら気づかせていただきました。平和な世界を目指すためには、まずは過去の出来事について知ることが一番大切だと私は考えるので、より多くの方が実際に資料館を訪れ、自分ごととして平和とは何かについて考えてもらうためにはどうすれば良いかについて一年間の探究で自分なりに答えを見つけ出せればと思います。

そして、このフィールドワークを通して、私たちの探究学習はたくさんの方々のご尽力の元に成り立っているということを実感し、支えてくださっている全ての方々に感謝すると共に、実りのある充実した学びにしようというやる気が湧いてきました。

【感想 高2 松本 愛望】

広島フィールドワークは、私にとって新しい挑戦の連続でした。

もともと平和について学ぶことに興味はあったのですが、何かに参加するのが怖い自分がいました。失敗するのがため、完璧にしなくちゃいけないという気持ちが無意識のうちに自分の中にあっただのだと思います。しかし、今回このフィールドワークに参加していろいろな今まででやってきていない体験をたくさんさせていただきました。また、原爆について小学校の時から知っているつもりでしたが全然違いました。主に、自分が習ってきたのが長崎の原爆についてだったので、広島原爆の恐ろしさや悲惨さについて十分に知れていませんでした。

今回広島フィールドワークに行って、聞いて、見て、感じて、原爆の悲惨さや残酷さについて知り、平和な世の中にするためにはどうしたらいいか考えるきっかけになりました。

特に印象に残っているのは、被爆体験者の河野キヨ美様による講話でした。平和資料館や原爆ドームなど原爆に関する建築物も見学しましたが、実際に河野様から語られる言葉には重みがありました。また話を聞き、憤りを感じました。なんで、同い年や私より若い子がなんの罪もなく、たくさん亡くなってしまったのだろうと憤りを感じました。そして、講話をお聴きするなかで、言葉を使って伝えることの大切さも改めて感じました。



↑共同起草した『高校生平和共同宣言』の発表



↑被爆者の河野キヨ美様の講話

今回のフィールドワークを通して、平和とは、今すぐに達成されるものではないと思いました。一人ひとりに平和の価値観があってそれは当たり前なことなのだと気づきました。だからこそ、対話を興味深く感じますし、それがもしかしたら争いのきっかけになるかもしれません。けれども、その時にどうやって平和的解決に向かうのが大切になってくると思います。そうやって平和的解決をしようと思いつい少しでも相手を分かろうとする気持ちが、平和への第一歩だと思います。このように平和について考えを深められたのも、この広島フィールドワークのおかげです。この経験を探究やいろいろな場面で活かしていきます。

【感想 高2 李 崎睿】

私は今回のフィールドワークを通して舟入高校と合同で活動することで、平和を思索するはじめての一步を踏み出せたと思います。平和宣言を自分たちで行い、みんなと討論することで、受け身で受けていた平和教育が主体的に考えることができるようになりました。この宣言が示している通り「平和」という問いの答えは、「1つではなく無限に答えがあり、永遠に考えなければならないものである。」「平和の実現は願うだけで達成されるものではなくこの世界すべての人が協力し合う必要がある」と考えれば考えるほどそう感じました。

また、原爆資料館や平和公園に行ったことで、国や民族関係なく、この地球に住んでいる人間として戦争の残酷さや原爆の恐ろしさ、命の尊さを改めて認識しました。そして、被爆体験者のお話を直接聞いたことで、未来を担う私たちが次世代へ平和のバトンを繋いでいかなければならないと思いました。そのつなぎ方として、これからの探究でしっかり考えたいと思います。

今回のフィールドワークの準備から発表までの期間を通して、人間としてすごく成長したと思います。生活面では人との付き合い方、ルールやマナー、新幹線の乗り方、時間やお金の管理などなど小さなことでも私にとってはどれも新鮮で勉強になりました。学習面でも平和に関する基礎知識はもちろん、英語だけでなく日本語の発音矯正や人に伝わるような表現方法など沢山の技術を得て、経験を積むことができました。

そして、長い練習を通過しての本番は、自分の気持ちをいっぱいぶち込んで宣言することができました。終わった後の大きな満足と達成感と共にほんとに終わるんだぁという惜しい気持ちもありました。何かを他人と共同で成し遂げる楽しさを味わうことができました。

一人一人との出会いが刺激になり、自分を進化する動機となりました。本当に最高の経験と出会いです。みんなと経ることができて嬉しいです。関係した人全員に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。おかげでとても有意義な時間を過ごせることができました。これからは全力でいろんな人を巻き込んで希望ある未来に向かって進んでいきたいです。

【感想 高2 小川 凜子】

私はこのフィールドワークで、自分自身をとて成長させることができました。私は最初、参加したいとは思っていたのですが、なかなか参加する勇気が出ませんでした。なぜなら、フィールドワークに参加する人は国際科の人が多くイメージで、普通科の自分なんかができるのかと不安に思ったからです。それでも広島に行って平和についてもっと自分の視野を広げ、知識を身につけたいと思いが強くなり参加することにしました。

私はディスカッションを担当することになり、「平和とは何か」について考えました。これまでは戦争や紛争がないこと＝平和と思っていましたが、本当にそれが平和と言えるのか疑問に思いこの機会にもう一度深く考えることにしました。考えていく中で、平和とは私たちが当たり前のように生活できていることこそが真の平和なのではないかと気づくことができました。そのことに気づけたのは、私にとってすごく大きな進歩だと感じています。

舟入生と一緒に活動できたのも、とても貴重な経験になりました。普段はオンラインで舟入生と探究をしているので、実際に会えた時はすごく感慨深かったです。会ってすぐに打ち解けて仲良くなり、本当にこのフィールドワークに参加してよかったと感じています。広島原爆資料館は、展示物の解説について、簡潔かつ、わかりやすく説明している印象を受けました。文量が少ないからこそ見た人それぞれ感じるものが変わり、訴えかけてくる感じがしまし

た。見ている途中で胸が苦しくなり、戦争はもう二度としてはいけない、恐ろしいものだ改めて感じました。

被爆体験者河野キヨ美さんの講話では、言葉の重みをすごく感じました。一番印象に残っている言葉が、「被爆で亡くなった友達や中学生の男の子達の分の魂をもらっているから長生きできている」という言葉です。戦争のことを語り手として話してほしいとお願いされたとき、当時のことを思い出すのは辛いけど伝えていかないと決めたといひます。この言葉を聞いて、河野さんの強く固い意志が伝わってきました。それと同時に、自分にこれから何ができるのか、何をしなければならぬのか自分なりに考えてみました。それは、高校生平和共同宣言にもあったように、周りの人を笑顔にすることだと思ひます。周りの人を笑顔にすると自分も自然と笑顔になり、笑顔の輪が広がっていくと思うからです。

私はこれまでの平和学習では、ただ話を聞いているだけで受け身となつてしまい、戦争や平和を自分とは程遠い存在に感じることもありましたが、しかし、今回の取り組みでは自分事として捉え、相手にどうしたら伝わるのかを考えながら取り組むことができたと思ひます。ぜひ、多くの人に自分事として捉えてもらうために、こういったフィールドワークに参加してほしいです。 今回のフィールドワークで一緒に活動した東のみんなにはたくさん迷惑をかけたと思ひます。そんな私が最後までやり遂げられたのも、みんなが優しく温かく見守ってくれたおかげです。班のみんながこの4人で本当によかったです。本当にありがとうございます。最後に、今回のフィールドワークにご尽力してくださった多くの皆様本当にありがとうございます。今回学んできたことを一生の宝として忘れずに、今後の探究に活かしていきます。本当に貴重な経験をさせていただきありがとうございます。



↑未来を創る、広島と長崎の生徒の友情

4 沖縄フィールドワーク

令和6年10月10日(木)～13日(日)、本校主催の「沖縄フィールドワーク」に、高1の横峯葉子、高2の栗崎寛奈、渡邊栞怜、小山翠、北島未颯が行いました。今回は「平和」をテーマとしており、対馬丸遭難体験者講話、ひめゆり学徒隊フィールドワーク、遺骨収集ボランティア体験、高校生交流、読谷村研修、米軍基地兵士インタビューを行いました。その概要を日付順に生徒のレポートを含め、記載します。

【1日目】

10月10日(木)、初日は長崎からの移動が主でしたが、宿泊所にて、今回遺骨収集ボランティア体験でご指導いただくNPO法人ガマフヤー代表の具志堅隆松先生に講話をいただきました。

具志堅先生は、1954年生まれ。ボーイスカウトのリーダーを務めた28歳のときに遺骨収集に参加したことをきっかけとして、ボランティアで遺骨収集を続け、家族の元へ返す取組を続けておられます。

講話では、沖縄戦の激戦地である「シュガーロードヒル」付近での遺骨収集について、画像を交えながらお話いただきました。そのときの遺骨収集の際に、ホームレスの方々の社会貢献の一環として遺骨収集が行われたことについても言及。厚生事業としての役割についても強調されました。生徒たちは先生の話に真剣に聴き入り、今回のフィールドワークへの決意を新たにしていました。



↑具志堅先生の講話

【2日目】＊以降、生徒レポート

2日目はまず、対馬丸記念館に訪れました。

対馬丸事件とは、1944年8月22日午後10時ごろに、児童を多く乗せた疎開船対馬丸がアメリカ軍の魚雷攻撃を受け、10分足らずで沈没してしまった事件のことです。偶然なことに、対馬丸を含む5隻の船団の行き先は私たちの住む長崎でした。対馬丸の乗船者1661名のうち生存者は177名ほどであったといえます。犠牲者のうち半分以上が子供でした。

研修では、当時4歳であった体験者の照屋恒様よりご講話を拝聴し、館内見学を行いました。照屋様は、事件時の断片的な記憶とともに、他の生存者の方の体験談を交えながらお話しくださいました。

私自身、長崎の被爆者の方々以外の戦争体験者講話を今までに拝聴したことはなく、真剣な想いで拝聴しました。照屋様は、真夜中の海に放り出されたときの記憶を私たちに語ってくださいました。照屋様は、十字に縄の張られた醤油樽にお母様と一緒にしがみついていたそうです。しかし、お母様と一緒に対馬丸に乗っていたお姉様を探しにどこかに行ってしまうわ、それが親子の別れとなったとのこと。その後、照屋様を救助された方によると、約16時間後、照屋様は近くにいた漁船に救助されました。沖縄に帰ってくるのができたのは6歳の時だったそうです。

生存者の方々にさらに苦しめたのは厳しく敷かれた箝口令でした。敗戦思想を広めないために、対馬丸事件について語ることを禁じられました。照屋様がご講話の最後に私たちにお伝えになったことは、「戦争はしてはいけない」ということです。戦争は勝っても負けても何もいいことはなく、多くの命や夢を奪うだけだと仰いました。

私がこのご講話で最も印象に残ったことは、最初、沖縄に住んでいる方々は沖縄が戦場になるはずがないと思っていたというお話でした。沖縄は本土から遠く離れた小さな島で、資源も少なかったため、戦場になるはずがないと当時の方々は思われており、疎開もなかなか進まなかったそうです。しかし、徐々に本土から多くの兵士が送られてきて、学校の校舎が兵舎に変わり、戦場になると自覚していきました。

この考えは、現代の私たちにも通じるところがあるのではないかと思います。実際に危機が自分の身に近付かなければ、自分ごととして考えられないのは、今も昔も同じではないかと私は感じました。

館内見学では当時の軍国教育や疎開後での子供たちの生活などをよく知ることが出来ました。対馬丸事件で亡くなられた方々の写真や子供たちが寝食を行っていた船内の再現などの展示があったのですが、亡くなられた方の遺品など当時からそのまま現存されているものは少なく、海上で起こった事件は陸上で起こるものとは様子が全く異なるのだということを実感しました。海の底に沈んでしまった船体やご遺体は陸上とは違い、水圧の関係などで引き上げて収集することが難しく、遺骨さえない子どもの親たちは、沈没した場所の近くの悪石島から石を拾ってきて、骨壺に入れたそうです。展示を通して伝わってきたのは犠牲となった子どもたち、住民たちの無念さでした。

親元を離れる悲しさ、寂しさもありながら、雪や汽車が見られると胸を躍らせて出発したにも関わらず、船と共に海底へ沈められた子どもたちを思うと、今の当たり前前日常がどれほど貴重なものなのかを実感しました。

(高2 小山翠)

次に、沖縄陸軍病院南風原壕群の一つである20号壕の内部を、ガイドの方の案内のもと見学させていただきました。沖縄陸軍病院南風原壕群は、第32軍(沖縄守備軍)直属の陸軍病院です。沖縄師範学校女子部・県立第一高等女学校の生徒(ひめゆり学徒)222人が教師18人に引率され、看護補助要員として動員され、治療看護、飯あげ、糞尿の始末、死体捨てなどの激務をこなしたことで知られています。



↑照屋様の講話



↑南風原20壕

当時の壕の中の様子や、米軍からの攻撃を受けたことやひめゆり学徒隊の仕事などについて、お話を聞かせていただきながら見学しました。実際に内部を見学する前に、20 壕の周辺に当時つくられた 19 号壕などの他の壕のことや、戦争を生き抜いた方々の想いを教えていただきました。また、当時の壕の中に漂っていた汗や尿、血などが混ざった獣のような臭いを再現したものを嗅ぐ体験を行いました。想像以上に強烈で、その匂いがこもった壕の中に長期間滞在することは、身体的にも精神的にもとても辛いものだったということを、体感したことで、わずかではあります、より身近に感じる事ができたと思います。

壕の中はとても暗く、幅が狭く、当時は簡易ベッドが置いてあり、人もたくさんいたのでとても窮屈だったと思います。壕の中には米軍の攻撃を受けて燃えた黒影の跡が残っていました。

次に、アブチラガマを訪れました。アブチラガマは、玉城村糸数にある全長約 270m の病院壕です。この長い壕のなかを、「語り部の友・ゆうな」所属の當山菊子様に案内していただきました。アブチラガマは、当初、陸軍壕や住民の避難壕として使用されていましたが、戦況が激しくなるなか 4 月下旬より病院壕として使用されました。ひめゆり学徒隊の方々は、前述した南風原壕からこのアブチラガマへ移動してきました。

アブチラガマでも南風原 20 壕と同様に火炎放射や爆風の跡が見られました。壕のなかはとても広く、作戦会議をする場所、手術場所、また手の施しようがないと判断された負傷兵の処置場所など、いくつかの部屋に分かれていました。また、壕の中に井戸もありました。壕の中は周囲が何も見えないほどの暗闇に包まれており、地面は滑りやすく、とても順調に歩みを進めることはできないほどでした。



↑アブチラガマ

私たちは手の施しようがないと判断された負傷兵が置き去りにされた場所で、暗闇体験をしました。実際に暗さを体験すると、当時その場所に放置された、体が病に侵され動かすこともできず、愛する家族や友人に会うこともできず、何も見えない暗闇の中でただ死が迫ってくるのを待つしかなかった方々の、言葉で表すところがないほどの苦しみや辛さを想像し、胸が苦しくなりました。

続いて、ひめゆり平和祈念資料館を訪れました。ここでは、沖縄尚学高校の代表生徒の皆さんと共に、資料館内を見学させていただいたのち、学芸課長の古賀徳子様へ質疑応答を行いました。

ひめゆり平和祈念資料館では、戦前から戦中、そして戦後という時系列で、学徒の生活や激務、被害の様子、苦しみなどが詳細に展示されていました。生き残ったひめゆり学徒隊の方々の当時の苦しみや心の内、また戦後まで彼女らを苦しめるトラウマを痛切に語っておられるビデオが放映されていました。見る側の感情に訴えかけるような展示が主で、とても心が苦しくなりました。見学の後の質疑応答では、これまで学習した過程や、実際に資料館を訪れて出てきた疑問について質問させていただきました。古賀様は、質問への回答に加え、背景知識を教えてください、とても学びになりました。

今回の沖縄フィールドワークでは、全体を通じて特にひめゆり学徒隊について詳しく学びましたが、実際に沖縄を訪れ彼女らの生活の過酷さを知り、衝撃を受けました。ひめゆり学徒隊の方々の当時の年齢が、現在の私たちと同じくらいであったということがやはり大きく、感情移入しました。とはいえ、当時の生活がいかに過酷で苦しいものだったかは想像することしかできません。そして、当時の彼女らの生活は、きっと私が想像したもの、その何万倍も辛いものだったろうと思います。

毎日少量の水と食料しか得られず、常に死と隣り合わせの状況で、負傷兵への食料を調達し、尿の処理をし、手術をする際に唯一の灯りとなるロウソクを持ち、麻酔なしの手術であまりの痛さに暴れてしまう負傷兵を押さえつけ、死体や切断された手足を捨てに行くなどの激務を、毎日こなさなければならなかった。そして一生懸命活動をしているにもかかわらず、気が狂ってしまった兵士などから暴言を吐かれることもあったという彼女たちを思うと、とても心が苦しくなりました。

陽の光や水があり、周りに好きな人たちがいて、自分でしたいことを選択できる、この当たり前と思っている日常に感謝するとともに、平和への想いを発信し続け、後世にも伝えていきたいと思ひます。（高2 北島未颯）

【3日目】

10月12日（土）、沖縄フィールドワーク3日目には、遺骨収集ボランティア団体「ガマフヤー」（那覇市）の具志堅隆松先生のご指導のもと、荒崎海岸にて、遺骨収集ボランティア体験を行いました。

場所は、米兵に追い詰められた多くの住民らが集団自決した沖縄本島最南端の糸満市の荒崎海岸です。参加した高1の横峯葉子が狭い岩場の隙間で地面を掘っていると、具志堅先生が、黄色がかった石のような小さな塊を二つ見つけました。横峯が奥に手を伸ばしてつかむと、人の足の指と骨盤の一部と思われる骨でした。

太平洋戦争末期の1945年3月、沖縄に米軍が上陸しました。「鉄の暴風」と呼ばれた激しい攻撃で沖縄本島では逃げ場を失った住民らが南へ南へと追い詰められていきました。荒崎海岸一帯では6月、多くの住民らが集団で自決し、その中には看護に動員された「ひめゆり学徒隊」の10代の女学生もいました。

同年代の女学生らが犠牲になった場所で、横峯はてのひらに載せた骨の重みを感じながら「敵に見つからないよう狭い岩場の奥にずっと隠れ、怖かっただろうな」と想像していました。



↑ 発見した遺骨



今回の研修は、沖縄県立那覇国際高校、沖縄尚学高校と合同で実施しました。私たちは3つの高校でチームを組み、5チームに分かれ行いました。

そして、本校の北島未颯のチームが、「ひめゆり学徒隊散華の跡」の周辺で、日本兵のものとみられる認識票を発見しました。縦5・5センチ、横約3・5センチのさびて赤茶けた金属板に部隊の通称番号や個人番号を示す「一二四二七 に 八」と刻まれていました。

こちらは、国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵の資料によると、この部隊は「機関砲第104大隊」で、現在の糸満市の摩文仁付近などで「玉砕した」との記録が残っているとのことです。また、この認識票だけでなく、遺骨、銃弾なども見つかりました。

具志堅先生が行なっている活動に、私たちも実際に参加してみて、1人で何十年も継続されている先生の凄さを感じました。荒崎海岸の青くて広い海をみて、この美しい海が当時はどうなっていたのだろうとおもって、すごく怖い気持ちになったと共に、必ずこれからの世界を平和にしていかなければならないという使命感を持ちました。

遺骨や遺物を、遺族の元へお返しし、遺族の方達の気持ちが少しでも楽になって欲しいという気持ちです。

私自身、平和に尽くす人になりたいと、決意する1日となりました。（高2 栗崎寛奈）



↑ 日本兵の認識票を発見

遺骨収集ボランティア体験の後に、高校生平和交流を、尚学高校、那覇県立那覇国際高校と行いました。

まず、各学校の学校紹介を行い、それぞれが行っている平和教育について共有しました。その後3校合同グループに分かれ、①「平和を阻んでいるものは何か」②「平和な世界を創るために、これからどのように活動していくか」という2つのテーマについて話し合いました。私のグループでは、①「平和を阻んでいるものは何か」という問いに対して、要因は「人の欲」で、例えば権力が欲しい、あるいは資源が欲しいといった欲が対立を生んでいるという意見がありました。



↑ 沖縄の高校生との友情

近年はAI兵器など、科学技術の発展が戦争利用されることも課題として出ました。

「そもそも平和とはなにか」について考えると、「日常生活が送れていること」「話し合いで物事を決定することができる状況」という意見が上がりました。また、「国連の常任理事国が持つ拒否権は力が強すぎるのではないか」という、現在起きている戦争・紛争について発展して議論することができました。

次に、②「平和な世界を創るために、これからどのように活動していくか」というテーマでの話し合いでは、「日常において不要な争いはしない」「さまざまな情報の正確性を確認し、誤情報に騙されない」という自分自身の意識に関する意見が出ました。また、「平和について考える機会が増えるように、全国にある平和の歌を発信する」「全国の歴史を肌で感じられる機会を増やす」という活動的な意見もありました。さらには「戦時中、愛国心などの国への忠誠を洗脳されていた。それを反対に生かせないか。平和思考が当たり前となるような教育はできないのか」といった意見もありました。

最後に、これらの話し合いで出た意見をもとに、「沖縄FWを通して学んだこと」「私たちが目指す平和」について、明日実施される米軍基地兵士との対話会で伝えるための英語のプレゼンテーション作成に移りました。私たちは、2つのグループに分かれ、「私たちが目指す平和」について話し合いました。話し合いの中で「『平和』について考えることのない世界」が平和なのではないか、今の世界が平和ではないからこそ平和について考えているのではないか、という意見にまとめ、このテーマをプレゼンテーションの軸として作成することにしました。少しでもよりわかりやすいものを作成できるよう、全員で何度も話し合い、細かい表現まで見直しながらプレゼンテーションを完成させることができました。

当日に初めて会った他校の生徒とプレゼンテーションを作成することは、とても大きな刺激になり、長崎と沖縄の高校生同士が平和な世界を創るために「問い」を深めるなかで、友情が深まったと思います。(高1 横峯葉子)

【4日目】

10月13日(日)、フィールドワーク最終日、私たちは、沖縄尚学高校の代表生徒と共に、ガイドの方のご案内のもと、チビチリガマ・シムクガマの見学を行いました。チビチリガマ・シムクガマのどちらにもある波平区のカマです。先に案内していただいたチビチリガマは、アメリカ軍の投降の呼びかけを聞き入れず、混乱したガマ内では毒薬注射や刃物などで、肉親相互が殺し合うという凄惨な集団自決が行われた場所です。

この集団自決により、住民約140名の内、83名が亡くなり、半数以上が12歳以下の子供であったと言われています。現在、遺族会の方々のご意向によりガマ内への立ち入りは禁止されています。



↑ チビチリガマ・シムクガマを見学

次に訪れたシムクガマは、チビチリガマとは正反対に、ガマ内に避難していた住民約 1000 名のほとんどがアメリカ軍の投降呼びかけに応じました。当時、ガマ内にはハワイ帰りの移民で英語の話せた比嘉平治さんと比嘉平三さんの2名がおり、彼らが「アメリカ人は住民を殺さない」と住民たちを説得し、アメリカ軍への攻撃を止めさせました。鬼畜米兵と教えられていたアメリカ軍人と交渉を終えて、無事に帰ってきた2人を見て、彼らがアメリカのスパイではないのかと疑う人もいる中、平治さんは「命どう宝」(沖縄の方言で「命こそ宝」という意味)を訴え、約 1000 名の命を助けることが出来たそうです。

この 2つのガマの明暗を分けた原因としては、英語を話すことが出来て、アメリカ人に親しみのあった比嘉さん達がいらっしやったことはもちろん、水の存在が大きかったのではないかと私は感じました。どちらのガマも近くに水が流れていたのですが、シムクガマは入ってみると、ガマの奥の方までずっと水が流れていました。戦時中、水はとても貴重なものでしたので、この水の存在は人々の希望となつたのではないかと思います。

しかし、シムクガマ内は水に濡れて大変すべりやすくなっており、少しでも滑って転んでしまうと傍で流れている水に落ちてしまう状況で、この中で生活していくのは大変なことだろうと思いました。

また、ガマの入り口の広さが、当時は違った様子だったのかもしれませんが、シムクガマの方が広く、開放的な雰囲気がありました。敵兵に見つかりやすくはありますが、ガマ内での暗闇体験を通して、光を感じる事が出来るのは生きる事への希望であったのではないかと思います。(高2 小山翠)

本フィールドワークの最終の取組として、株式会社 roku you の代表下向依梨様のご協力のもと、長崎東、沖縄尚学、那覇国際の3校の生徒が、沖縄の米軍基地兵士の方に3校合同で作成したプレゼンテーションの発表とインタビューを行いました。

プレゼンテーションでは、長崎の原爆被害の実相や、今回の研修で学んだこと、「私たちの考える平和」について発表しました。米軍基地兵士の方は熱心に聞いてくださり、プレゼン内容について、素晴らしいと講評され、核兵器の被害についても、使用については大変恐ろしいことである、と仰っていました。

インタビューでは、本研修を通して、平和、戦争について真剣に考えたからこそ、とても意味のある質問をすることができました。

今回お話しさせていただいた兵士の方の言葉は「兵士の総意、一般意見」ではなく、「個人の考え」であることが前提としてお話しいただきました。特に兵士の方の想いや家族、兄弟に対する愛を実感しながら、インタビューをさせていただきました。平和に関する質問も含め、米軍基地問題に関する質問もたくさんさせていただき、「米軍基地兵士が起こした問題についてどう思うか。」という質問に対しては、「ミスは誰にでも、どの組織にもあること。沖縄の米軍基地兵士は 1~3 年で任期が終わり新しい人に入れ替わることが多いので、さらにミスが起きやすい状態。また、問題についての報道はある側面からの報道のみのことも多く、事実を知らない兵士もいる」という米軍基地の現状についても話してくださいました。

このインタビューの中で特に印象に残ったことは、今回インタビューに答えてくださった米軍基地兵士の方は、「日本を愛している」ということです。米軍基地問題が世間に広まっている日本で勤務している兵士の方は、日本に対して、良い印象ばかり持っている兵士だけでなく、マイナスな印象を持っている兵士もいるのではないかと不安に思っていました。しかし、兵士の方は基地の仕事以外でも日本に来たかったと話してください、第二次世界大戦については被害だけでなく加害についても関心を持っており、長崎を訪れ原子爆弾についても学んだことがあると自身の平和学習についてお話しいただき、日本に関心を持っていくことへのうれしさを感じました。

また、私は探究テーマとしている多文化共生について「多様な文化が共存していくためには何か必要だと思うか。」という質問をしたところ、兵士の方は「良い人、悪い人がいることはどこの国も変わらない。言葉が違っても誰かが誰かを愛するのは変わらない。だから、まずは身近な自分の家族や兄弟を愛することが大切だ。」と答えてく



↑米軍基地兵士インタビュー

ございました。多文化共生を実現するためには、地域との連携などの政治、経済の面だけで考えていたのですが、難しく考えすぎず、身近なところに注目してみるという、新たな視点を見つけることができました。

(高2 渡邊栞伶)

5 東京①フィールドワーク

10月23日(水)24日(木)、東京大学大学院情報学環・学際情報学府 教授 渡邊英徳先生の研究室にて、本校高2の代表生徒である堤ももか、橋口由望、津田凜、安田優花と、高3の川内野穂花の5名、また本校の協働校である広島市立舟入高校の代表生徒3名を加えた計8名が、研修を行いました。

渡邊先生の研究室では、「ヒロシマ・アーカイブ」「ナガサキ・アーカイブ」「ウクライナ衛星画像マップ」「ガザ衛星画像マップ」「能登半島地震衛星画像マップ」など、戦争・災害のデジタルアーカイブズを製作。記憶を未来に継承する方法について研究されており、「記憶のコミュニティ」の形成を進めています。この度の研修では、同研究室博士課程の片山実咲様と協働して、研修内容を企画・検討しました。

1日目は生徒の探究経過を発表し、渡邊先生・研究室のみなさまから講評をいただきました。本校は、現在舟入高校と合同で「Peace Team」というチームを組み、平和系の探究活動を行っています。今回の研修では、そのチームの代表者が主に参加しました。

[生徒の探究テーマ]

- ・「平和の意義」を探究する～平和目標 PPPs の策定～
- ・新しい平和教育の在り方
- ・新しい平和の伝え方Ⅰ (デジタルの活用)
- ・新しい平和の伝え方Ⅱ (資料館の新たな活用)
- ・新しい「平和の絵本」の作成

生徒たちは現在進めている探究活動について、方向性と今後に向けての課題点について先生方に講評をいただき、多様な知識に触れ、視野をおおいに広げることができました。

2日目は、同研究室大学院生のKevin yang 様、片山実咲様による「SF プロトタイピング」研修を受けました。SF プロトタイピング (Speculative Fiction Prototyping) は、未来の可能性や技術の進化を探求し、それをフィクションの形で描くことで、新たなアイデアや展望を創出する手法です。サイエンスフィクション (SF) のストーリーテリングやビジョンを用いて、将来の世界や技術、社会の変化を模擬的に提示することを指します。

SF プロトタイピングは、クリエイティブな方法で未来を想像し、議論し、計画することを支援するツールとして利用されます。この手法はSF 作家やデザイナー、研究者、企業戦略家など、さまざまな分野の専門家によって活用されています。

生徒たちは、2チームに分かれ、「2075年の未来」がどうなっているかを想像。ここではあえて「ディストピア」を想像し、「悪い未来」を描きます。そしてその情報をAIに入力してストーリーを構築させ、その未来にならないよう現在のアクションをどうしていくかについて、ディスカッションを行います。創造力と想像力のどちらもフル活用する取組に、2チームとも議論が白熱。協働のなかでおおいに自分を高めあう時間となりました。「創造的思考力」の成長のための学びが、そこにはありました。

また、プロトタイピング後には同研究室の特任研究員 小松尚平様によるVR 体験を行い、デジタル技術について学びを深めました。最新鋭の高度で深い学びに触れる、大変貴重な時間となりました。



↑ 東大渡邊研究室での探究発表



↑ SF プロトタイピング

東京大学フィールドワークの生徒感想を、下記に記載します。

【感想 高2 安田 優花】

1 日目は主に、渡邊研究室での探究のプレゼン、質疑応答、フィードバックを行いました。

私たちの班は、IT を利用した新しい平和教育の探究について報告をしました。この探究の最終的な目的は、小中学生に、過去に起こった原爆をより自分ごと化し、自発的に原爆や平和について学んでもらうということです。このことを達成する手段の一つとして、「教育版マインクラフト」を利用し、原爆の被害を受けた建造物や街を再現し、それらを「Re:Earth」というアプリを利用して、地図に置いてみるということを提案しました。

QR コードや URL のリンクからそのサイトに移動できるようにすることで、だれもが使いやすい教育機会をつくることできないかと考えていましたが、実際にマインクラフトと Re:Earth を組み合わせることはできるのか、また、それらをサイトやアプリ化することは可能であるのかははっきりせず、渡邊研究室の方々にアドバイスをいただくことが、このフィールドワークの大きな目的の一つでした。

今回教示していただいたなかで、1 番印象に残ったのは、マインクラフトで作った建物を自分の身近な場所に置いてみる、というものです。Re:Earth を使って地図に置いてみるよりも、実際の規模が想像しやすいのではないかと思います。小中学生に過去の出来事をより鮮明に想像してもらう方法を模索していた私たちにとって、自分の身近なものと比較することができるという手段は、新しい教育に利用しやすいのではないかと考えました。

また、この取組がうまく実現できた後に、小中学生の平和に対するどのような行動を期待するべきかを考案していましたが、研究室の方々から、その後の行動は強制するものではなく、様子を見ているだけでも良いのではないかと助言をいただきました。行き詰まっていた探究の見通しが少しついたように感じました。

2 日目は、「SF プロトタイピング」に参加しました。一旦根拠を無視して創造してみる、という取組で、今回は、50 年後の世界について班に分かれて考えました。私の班は、情報の価値の変化に焦点を置いて議論を展開しました。50 年後は、石油や石炭などの資源がなくなり、情報が資源となるのではないかと考えました。その情報をめぐり、戦争が起こるが、その戦争に関する情報すらも国民には知らされることがなく、彼らは危険にさらされた生活を強いられる。国に頼ることはもはや不可能であるため、身近な人と小さな共同体を作り、自給自足時代の生活に戻る、という結論に至りました。根拠に縛られた頭で考えると出てこなさそうな話ではありますが、この SF プロトタイピングでの活動を通して、未来を自由に試作することの面白さを感じました。また、このような視点を持った考え方は、新たな発明や製品開発に生かすことができるのではないかと考えました。

このフィールドワークを通して、まず、広い視点を持つことの大切さを学びました。渡邊研究室の方々は、私たちがどんな小さな質問を投げかけたとしても、想像をはるかに超えた答えをすぐに返してくださいました。これは、普段の研究から得た莫大な量の知識があるからであるのはもちろん、平和の研究という範囲にとらわれない思考をしているからではないかと考えました。利用することができる手段や考え方は何でも利用してみて、それをいかにして自分の研究、探究と結びつけることができるかを模索していくことが、新しい発見につながるのだなと感じました。

また、大学院生からいただいた言葉の中で、「広島や長崎で平和教育を受けてきた人々は争いを起こそうという気持ちにはならない。そのような教育を受けていない人達が争いを起こすことを止めさせるためにはどうすればよいか考えてみてほしい。」という言葉が特に心に残りました。確かに、私はこれまで、長崎と広島だけに固執して、根本的な「誰もが受けやすい平和教育」というテーマを忘れかけていたように思います。このテーマは、既存の平和教育を受けたことでトラウマを抱いた人達のために考えられたものであると同時に、普段平和教育になじみがない人も挑戦しやすいものを考えるために設定したと私はとらえています。今後は、県外、または世界に発信していくために、QR コードや URL を利用して、簡単に受けられるものを検討していこうと思いました。

また、人間的にも大きく成長することができた 2 日間でした。プレゼンや大学院生、大学生との対話を通して、自分の伝える能力の未熟さを痛切に感じました。頭の中ではほんやりとわかっている、そのことをうまく言語化することができなければ、相手にしっかりと伝えることが難しくなります。この能力は、今後自分たちの探究に還

元する際や、公の場で発表する際に大いに必要となるものです。そのため、普段から大切だと思うことは必ず文字に起こしておいて、自分の頭の中を整理することが大切だと思いました。また、公の場で話す場数を踏んでおくことも重要だと思います。この点に関して、東京フィールドワークは1つの大きな機会だったなと感じました。

さらに、普段関わることはないような初対面の方とまっとうまく会話をできるようになりたいと感じました。フィールドワーク期間中、多くの人と関わる機会がありましたが、緊張して、聞くことに精一杯になっていたように思います。もちろん、多くの知識や経験を持った方の話を聞くだけでも貴重なことですが、自分から質問や提案を積極的にしていたら、より自分にとって実りのある対話が成立するのではないかと思います。今後は、ただ見聞きした情報を受け入れるだけでなく、自分から新たな情報、知識を創り出していけるよう、会話のキャッチボールを意識していきたいと思います。

今回のFWを行うにあたって、自分が想像しているよりも多くの方が尽力してくださいました。私はこのフィールドワークで探究面でも人間的な面でも確実に成長することができました。このような機会をいただいたことへの感謝を忘れずに、今後の探究、自分の生活に還元していきたいです。

【感想 高2 堤 ももか】

1日目は、東京大学大学院情報学環渡邊英徳先生の研究室にて探究発表や質疑応答を行い、フィードバックをいただきました。私の班は、長崎東高等学校生徒7名、広島市立舟入高等学校生徒3名、計10名で、小中学生に興味を持ってもらい、主体的に平和について考えてもらえるような機会を作ることを目的に、ITやパソコン、アプリを活用した新しい平和教育について探究を進めており、今回この探究について発表しました。

新しい平和教育として、「教育版マイクラフト」と「Re:earth」を組み合わせたアプリやQRコード、URLの作成を提案しました。マイクラフトで原子爆弾により被害を受けた建物や街並みなどを作成し、それをRe:earthの地図に置くことを考えました。これを一つのアプリやQRコード、URLでできるようにすれば誰もが使いやすい平和教育が実現できるのではないかという結論に至りました。

しかし、実際に二つのアプリを組み合わせることは可能なのか、それを一つのアプリにすることは可能なのかに行き詰まっており、これらについて渡邊研究室の方々にアドバイスをいただきました。アドバイスでは、私たちの知らなかった多くのアプリを教えていただき、視野がとても広くなりました。そのなかでも特に印象に残ったのは、原子爆弾により被害を受けた建物や街並みなどを、サイト上で知らない場所に置くよりも、自分の知っている場所や身近な場所に置いた方が想像しやすく被害も理解しやすい、というアドバイスです。確かに、知らない場所だと規模を理解するのは難しくなります。Re:earth内にそういったものを置くことしか考えていなかった私は、このアドバイスにとっても感銘を受け、現在、利用するアプリの再検討をしています。また、小中学生に新しい平和教育を行った後どのような行動を期待するべきか模索していましたが、その後の行動を見守るだけでも良いのではないかという意見をいただき、袋小路から抜け出すことができました。

2日目は、渡邊研究室の大学院の方主催のワークショップ、「SFプロトタイピング」に参加しました。これは、SFを通して未来を試作し製品、事業開発、組織変革をするというもので、今回は2075年のディストピアについてバックカスティング的に自由に発想しました。2班に分かれて行われ、私たちの班では食べるだけで知識を得られるパンの開発による問題について議論しました。そういったパンが開発されれば、知識を学ぶことが必要でなくなり、そうなると教育を受ける必要もなくなります。その結果、教育を受ける過程で獲得できる道徳心が欠如するのではないかと考えました。

続いて、班で考えたこの問題をもとにchat GPTに漫画の脚本を書かせ、その脚本の詳細をどう創るかについて、議論しました。もし道徳心をもたない人、つまり感情がない人が現れたらどのような問題が起こるかを全員で考えましたが、「道徳心」から生み出される行動が、どこからが本能でどこからが感情をもとにしたものなのかを判断するのに、すごく苦戦しました。ありえない未来を独創的に発想し、それについて議論することはとても面白かったです。何にも縛られず自分の考えを思うままに表現することは、何かを新たに創り出さなければならないと

きに、すごく効果的だと感じました。

このフィールドワークを通して一番身についたと感じることは、多方向からものを見る力です。探究の発表では自分たちの狭い視野でしか考えられていないことに気付かされ、SFプロトタイピングでは今までの視野の枠を超えることができました。渡邊研究室の方々の膨大な知識量に圧倒され、広い視野を得るためにはやはりまず知識が必要だと改めて気づかされました。バックグラウンドの大きさがどれだけ広い視野を持てるかに繋がっていました。

また、探究の発表に対するアドバイスを頂いたなかで、核兵器は悪か、必要悪か、という質疑になった際に、「誰が何と言おうとダメなものはダメだという強い気持ち」という言葉がすごく印象に残っています。私たちは幼いころから平和教育を受けているため戦争の被害や恐ろしさ、平和の尊さを実感しています。だが、そうではない人たちに理解してもらうのは難しいかもしれません。もし、私たちの考えた新しい教育では戦争について十分に知ってもらえず、平和の尊さを伝えきれなかったら意味があるのか、と考えたことがありました。しかし、この言葉を聞いて、自分たちが行っていることの価値を見出そうとするのではなく、絶対にダメだという気持ちを持っていることこそが大切だという初心を思い出すことができました。

普段では出会うことのできない様々な方と出会うことができ、さらに対話することができ、このフィールドワークは探究だけでなく人生においてもすごく刺激的で貴重な経験でした。自分がまだまだ稚拙であると感じることが多くあり、これから様々なことにチャレンジし経験値を増やして、より多角的な考え方を出来るようになりたいと思いました。フィールドワークで得たことを最大限に還元し、探究をより深いものにすると同時に自分自身も成長させていきたいと思います。

【感想 高2 津田 凜】

このフィールドワークでは想像以上に多くのことを学ぶことができました。

まず1日目では、各班で探究の問いの経緯から現状、今後の展望などを発表し、渡邊教授や大学生の方々から助言とご感想をいただきました。

私達の班では、「過去の過ちを繰り返さないため、言葉を超えて平和を今と未来に繋ぐ」という問いの元、活動をしています。バックグラウンドや言語の違いに関わらず、自分事として平和について考えてもらえるよう、マップにある被爆遺構の場所をタップすると、現在の写真と過去（被爆直後、被爆前）の写真が組み合さった360度見わたせるデータを作ることにしました。爆心地からの距離を実感してもらうため、自分の身近な場所を爆心地とした時に、どのくらいの場所にそれぞれの被爆遺構があるのか学ぶことができるようにしたいと考えています。

東京大学では、これらのことを発表させていただきました。発表後の助言の中で感じたことは、予想以上に、開発したいと考えていたデジタルツールはもうすでに世の中に存在するということです。私たちの班の中では、自分達にしかできないオリジナリティを重視していたため、このことを知った後、班員と新たな案を作る必要があると思っていました。しかしながら、今あるツールに付け足す、組み合わせるというのも一つの探究の手段になるということを知り、組み合わせる中にオリジナリティを入れていこうという思考に変わりました。それと同時に、「すでに存在しているなら他の新しい物を」という私の思考回路から、いつのまにか探究の手段であったデジタルツールの開発が目的になり始めていたことに気がつきました。渡邊研究所では、手段を作成するのに夢中になる時と、手段や目的など取り組んでいる探究を俯瞰し思考する時の2つの時間が大切だという学びを得ました。

2日目には、「SFプロトタイピング」を通じて、50年後の2075年の平和を各班に分かれて考えました。この「SFプロトタイピング」では単に未来のことを考えるだけでなく、そこで起こるディストピアを考えて今私たちにできることは何かを話し合います。

私たちの班では、現在学校で学ぶ勉学の知識を一瞬にして頭に入れられる機械が発明され、それが一般化し、人々が学校に行く必要がなくなった場合を考えました。何年もかけて学ぶことを一瞬で習得できるということは、効率が良い難易度も低いいため、年齢やハンディキャップの有無に関わらず誰でも学ぶことが可能になります。しかし、この機械を使うと学ぶ過程を飛ばして知識を頭に入れることに留まってしまいます。それはつまり、知識とし

て頭に入れる物事の成り立つ過程をも分からぬままに学ぶこととなります。これによって人々は、成り立つ理由を知りたいと思う気持ちも、批判的思考も無くすのではないかという仮説を立てました。特に、私たちが学ぶ道徳を知識として頭に入れると、人の気持ちをわかることも、またわかりたいと思う気持ちも持たなくなるのではないかと考えました。すなわち、この機械を使うと人々は物事を知識の面で見ず、欲や感情も失うということです。そんな人々と、現在の感情を持つ人間が共存するにはどうすればいいかを話し合いました。

話し合う中で、感情を持つ方法を教えあったり探しあったりするという案がでました。そこで大学院生の方が教えてくださったことが、「感情を持つということが、持たないということより優れているという発想になっていないか。物事を比べ、どちらかを下に見ると、そこから争いが発生してしまう」ということでした。私たちは、普段から高校で自分の固定概念で物事を見ず、批判的思考を持つことや多角的に物事を見ることを学んでいますが、無意識のうちに感情を持っている方がいいという思考回路に至っていました。そのことに気づいた時は、自分が思った親切心が、相手にとっては見下されているように見え、ひいては争いに繋がりがねないということに恐怖心を抱きました。最終的に、時間が足りずどうすればいいかまで考えることに辿り着きませんでした。改めて考えて見ると、自分の思考で相手のことを考えるのではなく、まずは相手の口から相手の望みを聞くことが大切だと、今は思っています。さらに、その相手の望みに自分の期待を持たないということが重要だと学びました。相手に期待すると、相手の望みが自分の期待と異なる時に勝手に落胆し、相手との対話をやめたいと感じてしまう可能性が出るからです。これからは、自分の意見を主張するのも大切だが、相手の意見は相手に任せ、日本人が比較的得意だという「気を利かせる」ということもセーブする必要があるのかもしれない。もしくはその「気を利かせる」ことで行おうとした行動を、相手にどう思うか尋ねてから行うということが重要になってくると思います。

この2日間を通して、今まで日常的になってしまっていたことの不合理な点に気づくことができたと共に、新しく知ることも多くありました。プログラム以外にも大学院生とお話しさせていただき、平和や戦争を加害の面で見ると日本人が加害を認め学ぶことの大切さと、その難しさを教えていただきました。私自身、加害の面で学ぶ重要性を考えていたので、その大学院生からご経験や考えを聞かせていただいたことは、とても貴重な機会となり改めて考え直すきっかけとなりました。このフィールドワークは、多くの方のおかげで実現し、学ぶことができました。この経験や学びに感謝しながら、探究に加え自分自身の平和活動にも繋げていきたいです。

【感想 高2 橋口 由望】

1日目は、東京大学渡邊研究室で、自分の探究活動について5チームがそれぞれプレゼンテーションを行い、渡邊教授や大学院生、大学生の方々から講評をいただきました。

私達のチームでは、同級生5人とともに、「絵本を用いた効果的な平和教育を行うことは可能か」というテーマのもと探究を行っており、その探究活動について発表しました。従来の平和教育の、幼児にとって恐怖感を感じる心理的負担という課題を解決するべく、戦争の悲惨な被害を連想させるような表現は使わず、間接的に表現した内容にできないかと考えています。また、戦争の原因の一つとしてあげられる、それぞれの正義のぶつかり合いという点に着目し、これからは多面的に見る力が必要だと考え、表と裏両方から2つの視点に立って読めるような内容の絵本を考えています。

プレゼンテーションでは、大まかな内容を実際に絵本の形で配布し、内容についてもアドバイスをいただきました。さらに、絵本に新規性が足りないことや、普及が難しいことなども課題点であり、その点についてもアドバイスをいただきました。アドバイスはどれも自分では気づけなかった課題点や、思いつかなかったようなアイデアばかりで、一気に自分の視野や考えが広がりました。特に、渡邊教授から、「これは平和の絵本ではなく、道徳的な絵本」という感想をいただき、間接的な表現にしようとしすぎたあまり、抽象度が高くなりすぎていたことに気づくことができました。絵本という手段に囚われすぎて、自分たちは絵本を通し、何を伝えたいのかが曖昧になってしまい、絵本の内容も一番に伝えたいことが伝えられなくなっていました。また、私達が絵本の対象としていた、5～7歳は他者を理解する能力のちょうど発達段階であり、今の内容のままでは、幼児の多面的に見る力を養うこ

とは難しいと教えて頂きました。そのため、これからは、対象年齢の引き上げか、絵本の内容の変更を行っていくかと思いました。また、絵本の構成についても面白いアイデアを頂き、生かしていくかと思いました。

2日目は、SFプロトタイピングというSFを通して未来を制作し、そこから逆算して意味を考えるという方法で、2075年の「平和」について、平和と反対の「争い」をテーマに2グループに分かれ、ディスカッションを行いました。私達のグループでは、人口増加や食料不足、環境問題、新しい戦争の形、AIなど様々な視点から意見が飛び交い、最終的には勉強しなくとも知識を取り入れられる機械が生まれ、人間は考えることをしなくなり、心がなくなってしまい、自分の利益だけを考えて争いが起きるのではないかと考えました。

次に、私たちが考えた未来をもとに、AIに脚本を考えてもらったのですが、想像以上にその内容が面白く、驚きました。そのAIの脚本をもとに、改めてその物語の細かい設定や意味、どうすれば争いがなくなるのかについて、班で協議しました。私達のグループの全員が、どうすれば心がない人が、心を持つことができるのか、全員が心を持ったほうがいいと考えていました。しかし、大学院生の方に、その考え自体が争いのもとだと言われ、ハッとしました。いつのまにか自分は、心があった方がいいと自分の普通や考え、価値観で決めつけてしまって、心がないことのメリットについては何も考えられていなかったのだと気付きました。やはり、自分達は気づかないうちにも自分の考える「普通」から物事をとらえてしまっており、多面的に物事を見る力が必要だと学びました。

また、私はもともと自分の意見を考えて、伝えるのが苦手です。最初、このディスカッションを行う時も不安がありました。いざディスカッションをしてみると、本当に楽しく、自分の意見もしっかりと伝えられました。みんなとの話し合いの中で、どんどん考えが深まっていき、視野も広がっていき、本当に貴重な経験となりました。自分の意見を言えたのは、根拠を度外視して、自由な発想をしたからでもあり、グループのみんながいたからでもあり、自分が研修を通して少しでも変わることができたからでもあると思います。これからは、自分の意見をもっと伝えられるようになりたいと思いました。

この2日間のフィールドワークは本当に貴重な経験となり、渡邊教授や大学院生、大学生の方々との対話1秒1秒、アドバイス1つ1つ、探究活動に熱心に取り組む仲間との活動全てが、驚きと発見ばかりでした。「平和」は本当に広い概念でそれを探究するのは難しく、そのため自分がやっても規模が大きすぎて、意味があるのかと感じてしまうことも多いです。しかし、渡邊教授がおっしゃっていた、「命は闇の中の瞬く光であり、戦争など色々な問題がある地球という闇の中で、光で地球全体を覆うことはできないが、瞬く光の私たちがどうすれば結びついて、すこしでも光を増やしていけるのかが大事」という言葉のように、自分達ができることを小さなことでもいっからしていくかと思いました。

また、今回の研修を通し、自分自身の課題点も多く見つかりました。特に、渡邊教授や大学院生の方々はもちろん、同じく平和について探究を行う仲間も、自分よりも平和やその他のことについての知識や考えの深さが圧倒的に多いと感じました。どれだけ、思考し、表現し、インプットからアウトプットを繰り返したかが、この差につながっていると思います。これからは、自分の学びたい、もっと深めたいという気持ちを大切に、色々なところに関心を向けていきたいと思っています。自分の意見を考え伝える力は、今回少し成長できたと感じますが、まだまだです。今回の研修を通し、多くの人と対話することによって、自分の視野や考えが広がり、深まっていくと感じました。そのため、これからは積極的に色々な人と対話し、その中で自分の意見をしっかりと伝え、相手の意見も吸収し、お互いに深めていくということを繰り返し、成長していきたいと思っています。

今回のフィールドワークは、本当に自分にとって大切な経験となりました。このような機会を与えてくださった多くの人に感謝し、学んだことを生かしていけるよう、努力し続けたいと思います。



↑ 研修に参加した舟入生と共に

6 東京②フィールドワーク

12月12日(木)、13日(金)、東京のアジア開発銀行(ADB)駐日事務所と国際連合大学にて、高2の繁宮佐和、富田大夢、有田匡佑、鴨川恵子、高橋煌良、平瀬皓、藤原美結が研修を行いました。国際教養の獲得、ならびに国際連合大学にて探究発表を行い、その深化と成長を図ることが目的です。

1日目はADBを訪れ、駐日代表の田村由美子様より活動内容についての講話、職員の高橋葉子様、浜田チャクマ恵子様から海外キャリアの実際についてお話をいただきました。また、実際のお仕事の様子を見学させていただき、国際支援ならびにキャリアについて学びを深めました。その後、ADBを訪れていたアジア各国の大学院留学生との対話会に参加し、英語で国際交流を楽しみました。

2日目は国際連合大学にて、サステナビリティ研究所の研究員の皆様に、英語にて発表を行いました。

【生徒の探究テーマ】

- ・「批判的思考力を高め、平和を多面的に見る絵本の作成」
- ・「途上国の識字率を向上させる知育玩具」
- ・「ポンガミアを活用したパーム油の代替案」
- ・「サンゴ礁の保全方法」

全てのチームに講評をいただき、フィードバックを得て、深い学びを得ることができました。また、施設見学や国際キャリアについての質疑応答も実施し、生徒の進路形成においても、大きな学びをいただきました。

下記、研修の概要について、生徒のレポートを記載します。

【研修レポート 高2 鴨川 恵子】

東アジア開発銀行(以下ADB)駐日代表事務所では、初めに代表の田村様よりADBの説明をしていただきました。ADBは国際開発金融機関のひとつで、アジアを専門に金融支援や技術支援、知的貢献を通して途上国の貧困削減や持続的な経済・社会的発展を総合的に支援しています。具体例としてはインフラの整備、ジェンダー問題の改善などが挙げられます。民間銀行や国連機関との大きな違いは、「利益を出す必要がないこと」であり、開発効果に焦点を当てた支援が可能になっています。



↑ADB駐日代表、田村様の特別講義

ほとんどのプロジェクトは始動までに数年の時間を費やし、入念に調査や検討を重ねています。しかし、新型コロナウイルスのパンデミックや災害などの緊急事態には、職員全員の寝る間も惜しむ迅速な対応により、数週間で支援を決定しました。国際機関が機能していないと批判されている現在でも、目に見えていないところでADBの職員の方々が開発途上国のためにご尽力されているという事実を知ることができました。

続いて海外経験が豊富な方や、国際結婚をされている方などが多いADBの職員の方々のキャリアについてお話をいただきました。話をさせていただいた3人のすべての方に共通していたのは、学生時代に海外に興味を持ち、開発途上国の現状を見聞きしていたことです。学生時代の経験が将来のキャリア形成に大きく影響するというのはよく言われることですが、ここでの話で改めてそのことを実感しました。

また国際結婚をされている方が、「相手と私は全く違う」と**思っているからこそ、日常の衝突を避けることができ、さらには違いを楽しむことができる**とおっしゃっていました。これは国籍が違う人との関係においてだけでなく、私たちの身近な人との関係においても通することだと感じました。そしてこの考え方こそが、多様性を認め合いながら生活することが求められる現代社会で重要になるのではないかと考えました。

最後に、ADBを通じた日本政府の資金協力による支援を受け、日本で大学院教育を受ける予定の方々の交流会に参加させていただきました。それぞれ異なる背景で、日本で学ぶ機会を得た方々とお話しする中で、ある方に

「日本人であることに誇りを持ってください」と言われました。その方は発展途上国の出身でしたが、日本出身である私よりも日本への愛国心が強いように思われ、並々ならぬ学ぶ意欲を持たれていました。日本で生まれ育ち、金銭的に不自由なく学ぶ機会を得ることができる私の恵まれた環境を自覚させられ、この環境を活かさなければならぬと考えました。

国際連合大学の探究発表では、私は“Critical Thinking for Peace”というテーマで、幼児への平和教育の探究活動に取り組んでいます。具体的には、両面から違う視点で読むことができ、するなどの工夫をした絵本を製作し、幼児への効果的な新しい平和教育を生み出すというものです。

今回、製作した絵本を持って、国際連合大学（以下国連大学）でプレゼンテーションを行いました。そして、博士課程をお持ちの3人の先生方に探究に対して助言をいただきました。まず良かった点として、私たちが製作した絵本の構成をお褒めいただきました。多様な視点で物事を考えるために両面から読めるようにする構成の絵本の製作は、私たちがこだわり続けたことなので、そこを褒めていただいたことで自信に繋がりました。改善点としては、絵本を読む幼児の対象年齢や家庭を明確にすることやより効果的な話の結末などをご指摘いただきました。今後、いただいたアドバイスを基に絵本に修正を加えた上で質の高いものを完成させ、出版・普及に向けて進めていきたいと考えます。

探究発表に続いて、国連大学で広報として働かれている職員の方にキャリアに関する質問に答えていただきました。国際機関で働くためのスキルや方法を伺う中で、国際社会の最先端で仕事をするためには“熱意”が必要不可欠であることが分かりました。どんなに知識や海外経験があっても、国際問題を解決したいという思いがなければ国際機関での仕事は務まらないように思われました。続いて、国連大学内の国際会議場などの施設見学をしました。国連の公式色である青色が多く用いられた場内や通訳用の別室など、実際の本格的な国際会議場を拝見しました。知っているようで知らなかった国連の会議の進行方法や公式言語など、新たな知識を得ることができました。

国連大学、またADB双方で、職員の方は“国際機関の機能不全”について触れられました。その方は自分たちがしていることが評価されないことに、もどかしさを感じる一方で、世界のために尽力しているという誇りを持っておられました。世間から評価されるかどうかではなく、世界をよりよくするためという一心で働かれている姿はとて輝いて見えました。そのような方々の働きがあつての私たちの暮らしと言っても過言ではないことに気づかれ、感謝というよりも尊敬の念を抱きました。2日間の研修期間の、国際的に働かれている多くの方々との出会いを通じ、現在の世界情勢に対しての国際機関の懸命なはたらきを知ることができました。これは普段の学校生活で机の上で学ぶようなものではなく、実際に活動されている方々から直接お話をうかがってこそ、現実味を帯びて知ることができるものでした。

改めてこのFWに携わってくださったすべての方々へ感謝申し上げます。そして、これからの人生において、FWでの経験を活かせるよう努力していきます。

【研修レポート 高2 藤原 美結】

1日目のアジア開発銀行で行った研修では、銀行の活動内容について、実際に勤務されている職員の方から講義を受けました。アジア開発銀行は、ADB（Asia Development Banks）と呼ばれ、金融支援や技術支援、知的貢献などを通してアジアの途上国の貧困削減や持続的な経済、社会発展を支援している組織です。ADBで働く職員の方がA（アジア国の支援）、D（発展途上国への支援）、B（銀行としての働き）のうち、どの分野に熱量を注いで働いているか、それぞれ思いがあるそうで、ADBが様々な側面を持った国際機関であることを認識しました。

私が特に印象に残ったお話は、新型コロナウイルスが世界的に蔓延し始めた当初、緊急性を要する場面での



↑外国人院生との交流会に参加

ADBの活動についてです。急速に広まる感染症を前に、すぐに支援を行わなければならない状況の中、24時間体制で会議を進めたと言います。平常時は、通常1年から3年ほどかけてプロジェクトを進めるところ、新型コロナウイルスが流行した2020年頃は数週間で検討し、実行に移したそうです。私はADBの緊急時の対応にとても感銘を受け、ADBはアジアの発展途上国の生活や経済を支え、社会に大きく貢献しているのだと知ることができました。

2日目は、国際連合大学（国連大学）で探究発表を行いました。私の班では、「Critical thinking for peace」というテーマのもと、平和に関する子供向けの絵本の作成を行ってきました。国連大学の方に完成した絵本を見せることができるかどうかが大きな課題でしたが、当日までになんとか形にし、講評をいただくことができました。

国連大学の方には、良かった点と改善すべき点の両方を教えていただきました。良かった点は、私たちが作成した絵本の、「本の両サイドから、異なった視点で読み進めることができ、最後本の真ん中で結末をむかえる」という本の形態についてです。非常にクリエイティブな発想だと言ってください、自信につながりました。改善すべき点としてアドバイスをいただいたことは、絵本の結末についてです。対立する者同士が対立したまま話を終えるのではなく、「対立する者同士、どうすれば対話し、問題を解決することができるか、子供たちに示す必要がある」と改善の方向性を示していただきました。今回講評いただいたことを生かしてより良い絵本作り、そしてより深い探求を進めていけるよう、今後に生かしていきたいと思います。

ADBで働いている方も、国連大学の職員の方も基本、英語でお仕事をされており、国際社会で生きていく上で、「英語」という言語の重要性を肌で感じました。国連大学で働いている方の「1日30分、いや15分でもいいから毎日必ず英語を勉強しなさい。そうしたら絶対に話せるようになります」という言葉がとても印象に残っています。その言葉を教訓に、今後の高校生活を過ごし、そして国際社会で活躍できる人間になりたいと感じました。

【研修レポート 高2 平瀬 皓】

ADBでははじめに、田村由美子駐日代表から、ADBの説明・活動内容についての紹介がありました。ADBでは、世界の貧困の様子やSDGs、ADBの取り組み、どのようにADBが支援活動に関わっているのかについて学びました。私が驚いたのは、「貧困とは、はく奪されることだと田村代表がおっしゃっていたことです。貧困というとお金がなく、貧しい暮らしをすることを思い浮かべますが、不平等、持続性の欠如、社会的保護がないこと、不十分な機会など所得面以外も含めた幅広い意味での「貧困」があることにとても驚きました。

また、ADBで働く日本人職員の高橋葉子さん、浜田チャクマ恵子さん、田村代表からキャリアについて、ご自身の経歴を交えながらお話をいただき、質疑応答も含めてキャリア形成についてたくさんのことを学びました。現在国際社会で活躍している方からアドバイスをいただき、将来自分がなりたい姿を見つけることができました。

その後、フィリピンのマニラにあるアジア開発銀行本社から、お仕事で駐日代表事務所に来られていたリーナさんと職員の方々が英語で会議をする様子を見学しました。また、会議後にはリーナさんからもキャリアについてお話しいただきました。その際、田村代表とリーナさんが「完璧じゃなくていい、話せば伝わるから自信と好奇心をもってコミュニケーションしよう」とアドバイスしてくださり、とても感銘を受けました。単語がわからないことや文法や表現を間違えることは恥ずかしいと思って、英語を話すのをためらいがちだった私にとって、とても勇気をもらえる言葉でした。また、ADBからの支援で日本を訪問していた留学生の方々と交流会をしました。留学生の皆さんがフレンドリーに質問してくれて、うまく英語を話せない私の話でも楽しそうに聞いてくださり、違う言



↑ 国連大学での探究発表

語・文化圏同士でも、共感しあい、とても楽しくコミュニケーションをとることができました。私が驚いたのは、皆さんが私の考えていたよりも「日本が好き、日本に来ることができてうれしい」と思ってくれていることでした。また、私たちの話を聞いて長崎を訪れるのが楽しみだとおっしゃっていた方もいて、互いを理解し、共感しあえることがこんなにもうれしいことなのだと気づきました。

国連大学では、私たちの探究発表とそれに対する研究者の方々からのフィードバック、国連大学職員の方々のキャリアの講話、そして国連大学・国連大学協会の(JFUNU)についての説明や国連大学の会議場のツアーを行いました。緊張はしましたが、学生のうちにこのような貴重な経験ができて本当によかったです。職員の方々のキャリア講話や大学ツアーでは、国際社会で生きていくために必要なことや自信をもってコミュニケーションをとることの大切さに気づきました。キャリア形成が求められる社会の中で、私たちが必要な力について以前よりも知識を深めることができました。



↑国連大学にてキャリアについて質疑応答

私たちが行っている探究は「知育玩具を利用して識字率の向上させることは可能か」というもので、文献調査や玩具制作会社への質問などを通して学習したことを生かし、特に識字率が低いインドの貧困地域にフォーカスして、子供たちが楽しく遊びながら言語を学べる知育玩具の作成を目指しています。実際に段ボールを使ってイラストと一緒に英単語を学べる積み木を作成し、プレゼン発表の際、国連大学の職員の方々に見ていただきました。

以下に私たちの探究についてフィードバックでいただいた改善点の内容を示します。

- ①なぜインドにフォーカスしたのかをもっと具体的に言うこと。
- ②おもちゃを作成するにあたって一番利益を得られる国、実現可能性が高い国についてさらに調査、説明を加えること。
- ③できるだけ古いデータを用いず新しいデータを用いること。
- ④貧困層の子供たちがどのようにおもちゃにアクセスできるか過程や仕組みについて考えること。

探究において班のメンバーだけでは行き詰まっていたことが、今回のフィールドワークでの講評を通して、改善すべきことやこれから具体的に何をすべきかがよくわかりました。今回いただいたフィードバックを生かしてこれから探究活動を行っていきたいと思います。

今回のADB・国連大学フィールドワーク全体を通して、新しい経験をする大切さを実感しました。現地で学んだことは、私が知らないようなことばかりで、このフィールドワークがなければ、職員の方々から聞いたことはおろか、ADBや国連大学についても知ることはなかったと思います。このフィールドワークで学んだ多くのことは私のキャリアに良い影響を与えることになると思います。

また、今回のフィールドワークで自分に必要なことやこれからやりたいことも見つけることができました。私が印象に残っているのは国連大学ツアーで、職員の森下さんがおっしゃっていた「語学は筋肉！使わなかったら衰えていく」という言葉で、語学を継続することの大切さを改めて確認しました。今回見つけたことを今後うまく活かして、国際社会で活躍できるような人間になりたいと思いました。

【研修レポート 高2 有田 匡佑】

アジア開発銀行駐日代表事務所（以下ADB）では、ADBの活動内容、職員の方々のキャリアの講話、英語での社内会議見学、そしてADBの支援を受けて日本に来た留学生との交流会などを行いました。最初は、ADBが霞が関の中心地にあるとても高いビルの中のオフィスということで入るのにもとても緊張しましたが、実際に研修を受けてみると職員の皆さんがとても気さくで、フレンドリーに接して下さってとても安心しました。

この研修に応募、そして行くことが決まった時点でADBについてある程度調べはしましたが、実際にどのよう

な活動を行っているのかお聞きして初めて学んだことが多くありました。私が特に驚いたのはADBの中立性です。中国、台湾、香港をそれぞれ独立して支援しており、政治的な問題に一切立ち入らずただアジアのために支援を行うという姿勢にとっても感銘を受けました。

そして駐日代表の田村様やフィリピンから来られていたリーナ様がおっしゃっていた「話せば伝わるのだから英語を話すことをためらわないほうがいい」という考えがとてもかっこいいと感じました。今まで単語や文法を間違えてはいけなく、完璧に聞き取り、話さなければならないと思っていたのに、そうではないと言われて自分の英語でのコミュニケーションに関する考え方が変わりました。

私がADBの活動の中で最も印象に残っているのが、ADBの支援を受けて日本にいられていた留学生の方々とお話したことです。自分たちがコミュニケーションを取ろうという意思があれば、お互いが母国語でない言語でも、相手の話を聞きとり自分の考えを伝えられるのだと実感することができました。そして何より印象的だったのは皆さんが「日本はすごい国だ、日本に来られてうれしい」とおっしゃっていたことです。希望をもって様々なことを学ぼうと日本に来てくれている、そんな彼らに恥じない日本であるべきだなと感じました。



↑外国人学生と交流を楽しむ生徒たち

国際連合大学本部（以下国連大学）では、私たちの探究発表とそのフィードバック、国連大職員の方々のキャリアの講話、そして国連大学についての説明やツアーを行いました。私たちが行っている探究は「知育玩具の作成を通して識字率の向上は可能か」というもので、文献調査や玩具制作会社への質問などを通して学習したことを生かし、識字率が低い子供たちが遊びながら言葉を学べる知育玩具の作成を目指しています。実際に段ボールを使ってイラストと一緒に英単語を学べる積み木を作成し、持っていきました。探究において班のメンバーだけでは行き詰っていた内容が、今回のフィールドワークでの講評を通して具体的に何をすべきかが見えてきました。今回いただいたフィードバックを生かしてこれから探究活動を行っていきたいと思います。

そして国連大学のキャリア講話や大学ツアーでは、自信をもってコミュニケーションをとることの大切さを学びました。特に広報の中張様と武居様がおっしゃられていた“Fake it until you make it.”（中身が伴うまでは、さも自分ができるように取り繕え）という言葉がとても印象に残っています。キャリアアップのための国際機関での様々な経験のお話は、終身雇用ではない今の時代におけるキャリアについて考えさせられました。

今回のフィールドワーク全体を通じて、私は自分が知らないことがたくさんあるのだなということを実感しました。ADBの存在すらも知らなかった自分にとっては、現地で学ぶすべてのことが新鮮でたくさんを感じました。その中で最も胸に響いたのは、国連大学で職員の方がおっしゃっていた「機能不全といわれる国連だが、その職員はみな世界の平和と平等に一握りでも貢献したい」と思って活動しているという言葉です。実際私はインターネットなどで国連の機能不全を訴える記事や投稿をしばしば目にし、それに共感していました。しかし国連で働いている人たちは微塵もそんなことを思っていないのだと知り、何も知らずにインターネットやメディアの情報だけを見ていた自分が恥ずかしくなりました。将来は自分で見聞きし世界の見聞を広め、国際社会で貢献できる人間になりたいと思います。

【研修レポート 高2 高橋 煌良】

1日目は、アジア開発銀行駐日代表事務所（以下ADB）において、ADBの活動内容の講義、3名の日本人職員によるキャリア講座、内部会議見学、開発途上国加盟国からの留学生との交流などの研修を行いました。

講義では、開発途上国援助の実態をはじめ、国際開発金融機関の役割などについて、とても分かりやすく説明をしていただき、途上国支援という概念が具体的に自分の頭の中に入ってきました。その後、班員全員が積極的に質

問をしており、班員の内発的・知的好奇心に感銘を受けました。

また、日本人職員の方々とフィリピン出身の職員、リーナさんによる実際の内部会議を見学することができたのが、とても印象に残っています。特に代表である田村さんのお仕事への情熱を強く感じることができました。言語による障壁を少しも感じさせない姿勢に憧れを強く感じ、自分の将来のキャリアについて再度考えさせられました。留学生との交流会では、当初はどうやってコミュニケーションを取ろうか不安でしたが、多くの学生さんや日本人のスタッフの方が気軽に声をかけてくれ、充実した時間を過ごすことができました。留学生の方々が想像以上に日本のことに興味を抱いていて、外からの視点から見て、改めて日本のすばらしさに気づかされました。

2日目は、青山学院大学の目の前に立つ、国際連合大学本部（以下国連大）を目にしたとき、今、自分は世界的な機関に訪れているのだなと思い、感動しました。国連大では、東高生による探究発表および講評、国連大・国連大学研究所の概要、構内見学などの研修を行いました。私たちの班が行った探究発表の問いは「知育玩具の作成を通して識字率の向上は可能か」であり、長崎の子供たちと共同作成する知育玩具を通して、途上国における識字率を向上することを目的としています。実際に私たちは作成する玩具のプロトタイプを作成し、国連大に持参しました。そこで、以下のような講評とアドバイスをいただくことができました。

〈評価できる点〉

- 識字率が低いことにより発生する課題を具体的に上げていた点
- 情報源が国際的に権威のある機関のものであった点
- 理論上の話ではなく、実際に玩具を作成していて、現実味をもたせていた点

〈改善点・アドバイス〉

- 特定の国に絞って支援を行うことにした背景や説明が少なかった
- 利益的であるかどうかや実現可能性を加味してターゲットとする国を調査するとよい
- 参照した情報が若干古いものであり、信ぴょう性を欠いている
- 実際の支援先の国や地域での玩具を提供するメカニズムを具体化するべきだ
- 乳幼児自身に知育玩具に色を塗らせることで、輸送コストを削減することができるのではないか
- 玩具の主題として家族を取り入れることについては、考慮の余地がある

これらのアドバイスひとつひとつに、真剣に向き合って、自分たちの探究発表を精錬させ、全体発表の場で学校内に還元できればと思っています。国連大のツアーを通して印象に残っていることは、昨今国連の機能不全について言及されることがありますが、職員の方々は見えない部分で尽力されており、少しでも現状を改善しようとして、パンデミック時には寝る間も惜しんで活動されたり、危険を顧みずに戦地や被災地などの現場に赴いたりして、精力的に活動している、といったことです。そしてスケールの大きなお話を聞くたびに、感動や尊敬の念を抱くとともに、自分がどれだけ無知であるのかを考えさせられました。

今回の東京フィールドワークを通して、「本物を感じる」ことができました。どんなに事前に調べていても、実際に現地に足を運んでみるとその場で感じることもあり、深く考えさせられることがたくさんありました。当初は壮大な規模の話だと感じていましたが、専門家や教授、同じような志を持つ仲間とともに様々な課題について考えることで、少しでも身近に感じるすることができました。

さらに、グローバルに活躍されている人の経験や功績を肌で感じることで、これからの進路を定める大きなモチベーションになりました。この研修に携わってくださったすべての関係者の方々に感謝し、その恩に報いることができるよう、今後の学生生活に生かしていきたいと思っています。

【研修レポート 高2 繁宮 佐和】

2日間の研修は、貴重な経験と多くの学びを得る機会となりました。国際的な環境に身を置き、日々世界規模の問題に向き合う、ADBと国連大学の職員の方々とお会いできた時間は、新鮮で新たな知見にあふれた時間でした。国際的な取り組みに触れる機会が少ない私にとって、国際問題の第一線にいる方々とお会いできたことはとても

も貴重な経験になりました。

私の班の探究課題は、日本人の生活にとっても身近な植物油であるパーム油がテーマとなっていますが、解決すべき最も大きな国際問題は、パーム油（アブラヤシ）の原産国である東南アジアの発展途上国にあります。世界で最も使用される植物油であるパーム油が、マレーシアとインドネシアで生産される過程で抱える環境問題・労働問題を解決するために、ポンガミアという植物がパーム油の代わりになり得ないか、またどのようにポンガミア栽培を進めるべきかというテーマで探究を行ってきました。

具体的な内容としては、日本と東南アジア、それぞれにおけるポンガミア栽培の導入方法の勘案です。ポンガミアの代用を進める上で、まず日本におけるポンガミア油の普及を推進するため、鹿児島島の荒廃農地を使用したポンガミア栽培計画とコストと収益の計算を行いました。そして、東南アジアでのアブラヤシ栽培を削減するために、ポンガミアをどのように推奨すべきか、栽培を導入する手順について考えました。

探究を進める中、知識だけでは問題に触れて深刻性を知ることができなかつたので、今回アジア開発銀行で発展途上国出身の大学院生の方々と会話する機会をいただけたことは、今後も探究を進めていく大きな原動力になりました。植物油の生産過程にある問題の一つには児童労働と学ぶ権利の侵害があるため、大学院生の方々の学びへの熱い意思に触れて、問題解決の必要性を改めて感じました。

国連大学での探究発表では、発表方法の改善についてのアドバイスを中心に講評していただきました。今後探究発表を行う際に、探究の成果をより効果的に相手に伝えるには、先行研究の情報をさらに提示する必要があること、写真や表を用いた視覚的な情報の提示が不十分であること、などの指摘をいただきました。

また、他の班の発表に対する講評でも多くの学びがありました。国際的な問題に関して資料を集める際の注意点、発表時に意識する点や綿密な下調べの重要性を学びました。これらの学びを全て今後の探究に活かしていけるよう、早急な改善と今後の探究の計画を行っていきます。

また、国連大学では、広報を担当されている武居結紀子さんから、国連大学の仕組みや役割について明瞭かつ丁寧に説明してくださり、事前に質問していた内容に対して、一つ一つ丁寧に回答していただきました。また、国連大学に所属されるまでのキャリアの紹介も今後の進路選択で参考になる貴重なお話でした。

その後、国連大学内の2つのホールを紹介していただきました。ウ・タント国際会議場と、エリザベス・ローズ国際会議場です。ウ・タント国際会議場は国連大学の創設に貢献された第3代国連事務総長ウ・タント氏の名前を、エリザベス・ローズ国際会議場は大学創設に尽力されたエリザベス・ローズ氏の名前を冠しているそうです。国連大学での会議の様子や、国連大学協力会（JFUNU）についても詳しく説明していただきました。

ADBと国連大学のどちらでも、職員の方々のお仕事に対する熱意と誇りを強く感じました。あのような熱意を持って国際問題に向き合う方々にお会いできたことは大きな価値のある経験でした。今回、ADBと国連大学のフィールドワークに参加させていただいたおかげで、探究と今後のキャリアに関して多くの学びを得ることができました。国際問題の解決に尽力される方々とお会いすることで、今後の進路と目標への想いが強くなりました。お会いして改めて感じた憧れと尊敬の気持ちを忘れずに、目標に向かって勉強を続けていこうと思います。このフィールドワークのために尽力してくださった全ての方に感謝を忘れずに、今回得たものを今後活かしていきます。

【研修レポート 高2 富田 大夢】

1日目はADB（アジア開発銀行）にお邪魔させていただき、多くのお話を伺いました。

ADBでは主に発展途上国に対する支援を行っており、参加国は69カ国・地域にのぼります。駐在事務所は40ヶ所以上あり、職員数は3916人の方が働いています。ADBの支援は緊急性の高いものから中・長期的なものまで幅広く行われていて、その分野も様々でした。

ADBのことについて講義をいただいた後、職員の皆様のキャリアについてお話を聞きました。3人の方のお話を聞きましたが、その中で共通して思ったのは、自分なりの考えやものの見方を持つことの大切さです。3人それぞれがまったく違う人生を送っていて、そこで培われた考え方やものの見方は異なっていました。日本人は同質性

を好む傾向がありますが、職員さんのお話を聞いて自分なりの考えを持つことが大切だと感じました。その後、実際にお仕事をしている場を見させていただきました。協議している姿は真剣そのもので、お互いに意見をぶつけながらも建設的な会話が英語で進められていました。

その後、各都道府県の大学に ADB の支援で留学している大学の方々と英語でお話しました。私たちの英語を真剣に聞き取りかつ理解しやすい英語で話してくださって、とても楽しい時間を過ごすことができました。とても印象に残っているのは、留学生のほとんどが私たち以上に日本のことを誇りに思ってくれていたことです。多くの方がおっしゃっていたのは、「日本に住んでいるあなたたちはとても幸せです。そしてここはとてもいいところです。ぜひこの国を誇ってください。」とのことでした。留学生の方と会話をしていく中で改めて日本の教育水準の高さを認識し、よりいっそう学習に励んでいきたいと思いました。

2 日目は、渋谷区にある国連大学にお邪魔させていただき、探究発表と学内見学を行いました。

現在、私の班はサンゴ礁の保全と長崎の経済発展を志向したグローバルな商品開発について探究を行っています。近年、様々な問題からサンゴ礁の白化が問題視されています。白化とは、サンゴと共生関係にある褐虫藻が何らかの要因によって死亡することによってサンゴが生命維持できなくなり、色が抜け、死んでしまう現象のことです。要因は多くありますが、私たちは日焼け止めに着目しサンゴにやさしい日焼け止めの製作を考えています。

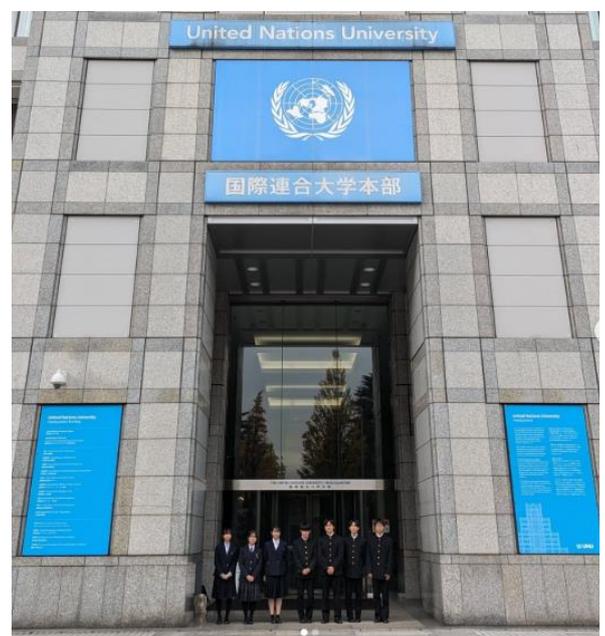
また、長崎県の特産品であるみかんの廃棄も地域の課題の一つとして挙げられています。長崎では果皮だけでも年間3万トンもの量が廃棄されており、深刻な問題となっています。そこで、この2つの問題を多くの人に知ってもらうと同時に、環境にやさしく、長崎の要素を取り入れた日焼け止めの開発を行うことを目標にしています。

そして、これらを広める手段として、現在行われている Pok é mon local acts で長崎の応援ポケモンに選ばれたデンリュウをパッケージに使用することで、多くの人に手に取っていただけるのではないかと考えました。

上記のことをまとめ、国連大学の研究員の方々の前で発表したところ、3つのご意見を頂くことができました。

1 つ目は実験の際、自分たち人間を被験体にするのはよくないということです。どのような副作用や影響が出るかわからないので他の代用できるもので実験するのが良いとのことでした。2 つ目はサンゴ以外の環境にはどのような影響があるのかを考えてみてもいいということです。私たちはサンゴにしか注目していませんでしたが、他の生物にはどのような影響が出るのかをリサーチしてみるといいということ学びました。3 つ目はもっとポケモンと絡ませてみるということです。研究員の方にポケモンが好きな方がいらっやして、ポケモンには「オレンの実」という木の实があつて、そういったものをイラストに取り入れてみたら面白いのではないのかと助言をいただくことができました。まだまだ多くの改善点があり、課題も山積みですが、この探究発表を通して大きく成長できたのではないかと思います。この経験を生かして探究発表に精進していけたらと思います。

次に、国連大学についてと大学内の施設の説明を聞きました。国連大学はグローバルなシンクタンクであり大学院の教育機関で、本部を日本に置いています。大学には多くの方が在籍しており、研究や勉強が行われています。そして、関連施設が世界各国にあり、連携が可能になっています。大まかに説明を受けた後、国連大学の広報部の方にキャリアについての質問に答えていただきました。その中で一番印象に残っているのは、お話をさせていただいたお二方がどちらも海外で働いた経験があつたことです。動機は様々ですが、実際に海外で生活をし、英語で会話をしていく中で異文化を知り、日本では得られないものを得られたそうです。その後、第三代国連事務総長「ウ・タント」の名を冠したウ・タント国際会議場とエリザベス・ローズ国際会議場を見学し、国連大学の歴史について教えてもらいました。とても興味深いお話を聞くことができ、とても有意義な時間でした。



↑ 国際連合大学の入口にて

この研修を通して私が一番心に残っていることは、多くの考え方や価値観に触れて、自分以外の視点を知ることの大切さです。ADBでも、国連大学でもそうでしたが、関わってくださった方々全員が違う考えを持っていました。それは、それぞれが違うストーリーを歩んだことで形成されていったものだと感じます。

海外に行った経緯や行ってきたことは違いますが、各々が見てきたことや感じてきたことは、その後の人生に大きくかかわっているのは紛れもない事実であり、キャリア形成のみならず今後の多くの場面で生かされていたのだと思います。まだ高校生の身分ではありますが、今後も勉学に励みつつ、ボランティアなどの活動を通して、多くの価値観や見方に触れて、人生を豊かにしていきたいと思います。

☆審査員特別賞&全国大会出場 決定! ☆

上記、ADB、国連大学にて研修を行った富田大夢の探究チームが、12月14日(土)に開催された「第10回全国ユース環境活動発表大会九州沖縄大会」で『審査委員特別賞』を受賞しました。(本校初)

また、本チームは、厳しい予選を勝ち抜き、3月23日(日)~24日(月)に開催される「第10回大阪大学国際公共カンファレンス」(探究全国大会)にも、出場が決定しました。生徒の今後の活躍に、どうかご期待ください!



↑ 国際連合大学の先生方と共に



↑ 審査委員特別賞を受賞!

3 三菱重工との協働

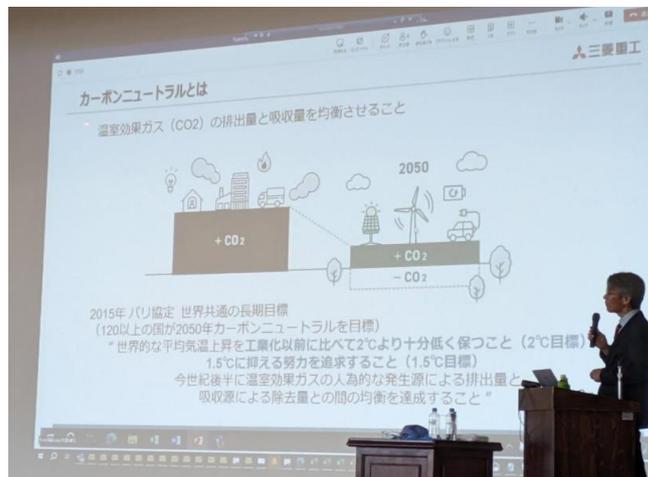
令和6年度、三菱みらい育成財団の吉田憲史様のご協力により、本校は三菱重工総合研究所との協働プログラムを新たに企画し、実施することができました。地元長崎が誇るグローバル企業の三菱重工との協働は、本校にとって待望の実施であり、生徒の成長、キャリア形成を促す大きな契機となりました。その取組について、記載致します。

① 三菱重工カーボンニュートラル講演会

6月13日(木)、「三菱みらい育成財団心のエンジンを駆動する教育プログラム基調講演会」と題し、三菱重工総合研究所副所長(講演実施時)の茨木誠一先生をお迎えし、高1・2全生徒を対象に講演会を実施しました。また、本講演会は、11月1日(金)に開催する、三菱重工フィールドワークの事前学習も踏まえて実施しました。

講師の茨木先生は、長崎県立諫早高校をご卒業の後、九州大学工学部機械工学科に進学されました。その後、九州大学大学院工学研究科に進まれ、三菱重工株式会社に入社されて以来、ターボチャージャ、産業用圧縮機、小型ガスタービンなどの高性能化、製品開発に従事されました。レーザを用いた流れの計測と数値シミュレーションを併用した流動現象の解明、AIを用いた最適設計法の開発などに取り組まれています。また、日本機械学会のフェローを務められています。講演では、世界的な環境課題と各国のエネルギー政策の基礎知識を踏まえ、三菱重工が取り組まれているカーボンニュートラルの実践について、大変興味深い内容をご教授いただきました。講演途中では二酸化炭素の吸収に関する実験デモンストレーションも行われ、生徒は楽しみながら参観することができました。生徒の感想を紹介致します。

「私の父は三菱で働いており、部署は違いますが、『三菱の研究所では環境問題に特化した取り組みをしているよ』と話を聞くことができました。今回の講演では、なかなか知ることの出来ない三菱のカーボンニュートラルを意識した開発や、橋の耐久性の調査・製作などを聞くことが出来ました。また幅広い分野を担っていると理解できました。私は講演の中で、CO₂ 吸収液がとても印象に残りました。ペットボトルを振ることで収縮する仕組みを見る事ができて、とても凄いなと思いました。こんな製品が存在することに驚きました。また日本は26年後に脱炭素社会を目指しています。その頃には私たちが社会のリーダーとなっています。今後の地球環境を守っていくために私たちは、資源の無駄遣いをやめることを、一人ひとりが実感して取り組むことが大切だと改めて思いました。今回の講演を聞いてより取り組みを知ることが出来ました。」(高1)



↑ 副所長茨木様の特別講演

「私が今日の講演会で考えたことは主に2つあります。1つ目は、学習する意味についてです。講演会で紹介された技術の仕組みの中には、化学の知識が使われているものがありました。高校生が習っている内容でも、最先端のところで意外にも役に立つことを知り、今様々なことを学ぶ意味がより大きくなったと感じました。将来、自分が深めたい分野ができた時のために、今のうちから様々な分野のことに興味を持ち、学習していきたいと思いました。2つ目は、多くの視点を持つことの大切さです。二酸化炭素の削減のために「排出を抑える」「吸収する」という2つの視点を持つことで、より削減できて良い結果に繋がっていることを知りました。日常から、1つの考え方に留まらずに多様な考え方を取り入れて、より良いものを作り上げることができるようになりたいと思いました。」(高2)

「私は、茨木先生のお話を聞いて、三菱の会社ではこんなにも直接的に地球規模の環境問題に向き合うことができるのかと驚きました。きっと三菱の社員さんたちは地球温暖化などについて本当に真剣に考える人ばかりなのだと思います。そして、それは東高の生徒についても当てはまると思います。東高には本気で世界を変えたいと動いている人たちがいます。ぼくもいつかそのうちの1人になりたいと思っています。本日は、とても貴重な体験をさせていただいてありがとうございました。」(高1)

講演会の後、希望者対象に、座談会を実施しました。参加した生徒たちからは、予定していた時間を超過するほど次々に質問が飛び交いました。茨木様には、ご多用なかお時間ギリギリまで生徒の質問にご対応していただきました。質問のなかには、カーボンニュートラルや代替エネルギーについての専門的な質問のみならず、キャリア形成に関する質問もありました。



↑ 座談会において、活発な質疑応答を実施

先生には、深い専門知識に加え、学びに向かう高校生に、あたたかい激励のメッセージを贈っていただきました。座談会に参加した生徒たちの感想を下記、紹介します。

「ネットで調べたりしているときには理解できなかった研究内容を、イメージを持つことが出来るようになりました。座談会では、新しいエネルギーや開発製品を普及させることの難しさや、環境改善のための方策と経営・販売の経済的・財政的な面での難しさなど、現実味のあるお話をうかがうことが出来て、高校生にはあまり知る機会のない視点をもらうことが出来ました。」(高2)

「今日、僕は三菱の技術力にとっても感動しました。これまで、三菱は防衛や造船、ロケット、発電等を扱う重工業メーカーであるとは聞いたことはありましたが、まさか天然ガスから水素を製造したり、アンモニアを石炭火力発電

に混ぜて発電することを計画・開発したり、二酸化炭素を吸収する液体を開発したりしていることは初耳だったので、とても勉強になりました。これから日本を引っ張っていける人材になるために、僕たちも高校生のうちからたくさんの知識を身につけて、『ともに良き世を創る』ことができるように努力していきます。」(高1)

高度な知識とともに、先生からいただいた「これからの世界を創っていくのは君たち自身だ」という熱くそして希望あるメッセージに、生徒たちは、よりよき未来を創る決意を新たにしていました。茨木先生、三菱重工総合研究所のみなさま、重ね重ね、この度は素晴らしい成長の機会を賜り、本当にありがとうございました。

② 三菱重工フィールドワーク

11月1日(木)、本校の創立記念日に、三菱重工総合研究所にて、本校高1・2合わせて40名がフィールドワークを実施しました。本校では、三菱重工と協働する探究チーム「Engine Group」を結成しており、そのチームの生徒を中心に実施しました。テーマは「カーボンニュートラル」。長崎から二酸化炭素ゼロを達成するという目標を掲げ、最新鋭の設備で研究を進める三菱総合研究所に学び、生徒は自身の探究を深めていきます。

6月13日(木)には、副所長(講演会当時)茨城誠一様の講演会を開催し、知識を収集して事前学習を行いました。そして本日、実際に研究所施設を見学してさらに体験的な学びを行った後、三菱研究所所員のみなさんとワークショップをおこない、「カーボンニュートラル」の課題とその解決策について協議します。

まず、主幹の中馬康晴様から研究所についてご紹介いただき、その後、2班に分かれて研究所内を見学しました。伝熱棟(水素製造3種類簡易版)、一般棟(CO₂回収・加水分解)、バイオビジョン棟(SAF)、耐航性能水槽を回りました。各施設では研究所の所員のみなさまからご説明をいただき、生徒の質問にお答えいただきました。予定の時間を超えるほど生徒の質問が次々に飛び交いましたが、研究所員のみなさまは、生徒の質問に丁寧にお答えいただきました。最新鋭の研究設備の見学と研究員のみなさまの解説に、生徒の学びは大きく深まりました。



↑施設見学、活発な質疑応答が行われた

その後、ワークショップに移ります。ワークショップでは、テーマ(問い)ごとに、生徒と所員のみなさんでグループをつくります。所員のみなさんがご自身の業務を紹介された後、問いについて生徒たちが事前に考えてきた解決策を発表、それに対してプロフェッショナルである所員の皆さんが講評し、さらに生徒が質問するという形で進め、協働しながら「解決策」を考案します。そして最後に、グループ内で「ベスト」と思われる解答を、代表者が発表し共有します。今回協議したテーマ(問い)は下記のとおりです。

- ・カーボンニュートラルについて(なぜ世界でカーボンニュートラルに走り組んでいるのか、カーボンニュートラルを達成するために必要なことは何か)
- ・クリーンエネルギーについて(将来のエネルギー構成(太陽光・風車・原子力・火力・水力など)のあるべき姿、そのあるべき姿を実現するために必要なことは何か)
- ・アンモニア利用について(燃料としてアンモニアを利用することのメリット・課題)
- ・水素利用について(燃料として水素を利用することのメリット・課題)
- ・水系製造方法について(水素を製造するための方法・課題)
- ・CCUSIについて(CO₂の回収、利用、貯蔵する世の中の動向、課題)
- ・SAFについて(航空業界のカーボンニュートラルの課題)
- ・電化について(主に電気自動車に関する世の中の動向・課題)

生徒たちは解決策について、行政支援や民間企業の取組などの視点、または日頃のエコな取組に言及し、自分ごと化したアイデアなど、事前に調べ考案した内容を発表しました。研究所員のみなさまからは、専門的な視点でその一つひとつに講評、またアドバイスを賜り、ワークショップは活況を帯びていました。

最後には、チームの「ベスト解決策」をそれぞれのチームが発表し、全員で共有しました。カーボンニュートラルをはじめ、工学系や環境系の探究活動を行っている生徒も多く参加していたことから、そのヒントを見つけた生徒も多くいました。



↑活況するワークショップ

何より、郷土長崎が誇る三菱重工総合研究所を舞台に、世界をフィールドに活躍している地元の大人の方と本校の生徒たちが、未来について真剣に話している姿は、感動そのものでした。生徒たちは、この機会に大きく成長したことで、改めて郷土である長崎を誇りに感じていました。下記、生徒の感想を紹介します。

「自分の目で世界でも最先端の技術を見ることができたり、実際に三菱で研究をしている方とワークショップを通して話すことができたりして、自分の考えを深めると同時に成長することができたかなと思います。見学でお話を伺っているときにこれ高校でもう習ったかな？と聞かれることがあり、まだやっていなかったけど今習っていることは将来にも生きてくるということを深く感じたので、日々の勉強も大切にしていきたいです。」(高1)

「普段の班の話し合いでは無いような豊富な意見を出し合うことができ、事前に調べてきていたことやこれまでの人生で培ってきた知識を最大限生かして、話し合うことができました。自分には大きすぎるテーマでなにもできないと思っていましたが、話をしていく中で、自分にもできることは何かあり、それは問題の解決に対して微力だけど、無力ではないと分かりました。相手にわかりやすく伝えようと頑張って考えて発表することができたのでこの経験をこれからも忘れずに生かしていけたら良いなと思いました。」(高1)

「私がワークショップを終えて最も価値があったと感じたのは、素人の高校生である私たちが一生懸命考えた案に対して三菱の職員の方が真剣に考えてアドバイスをしてくださったことです。私は今回のワークショップを経験するまでワークショップという取り組みに対してあまり積極的ではありませんでした。それは、仕事としてゼロカーボンに取り組んでいる三菱の職員の方に素人の高校生が提案をしたところで真剣には考えてはいただけないだろうと考えていたためです。しかし、職員の皆さんは私が考えた案に対して笑うどころか、真剣に案の実現の可能性やアドバイスをしてくださいました。私は、今回のワークショップを通して社会に対して疑問を積極的に投じることの重要性を知ることが出来ました。」(高1)

「今回のワークショップで、自分は電気自動車に対する認識を大きく変えることができました。以前まで自分は電気自動車が普及しないのはそもそもの性能が低いからだという思い込みが強くありました。しかし、研究者の方々や他の生徒との意見交換の中で、自分の認識が大きな誤りであったことを知りました。今回のようなワークショップなら、自分の意見を何の遠慮もなくぶつけて意見をもらうこともできるし、逆にぶつけられた意見をもとに新しい提案を作り出すことができると思いました。特に専門家の方がフラットな関係で自分たちに接してくれることが最も印象的で、それまでの一方的なワークショップや講演会とは全く異なる体験となりました。」(高1)

「ワークショップではアンモニアについて考え、自分はアンモニア発電について課題とその解決策について考え発表しましたがそこで感じたことは、どんな解決策にしても一筋縄ではいかないということです。解決策自体は環境に負荷をかけることが少なくいいアイデアがたくさんあったのですが、効率やコストなどの面で考えた時に実現が難しいというフィードバックをもらうことが多く、環境について考えることはもちろんのこと、効率やコスト、安全性などといった様々な要素も考慮して考えないといけないということを知り、アンモニアの扱いの難しさを知ることができました。そのことを承知の上で三菱重工は研究、実験を繰り返していて、私たちが想像する何倍も難しいことをやっているんだなと感じ、三菱重工の凄さを感じるすることができました。」(高2)

「ワークショップでは初めに自己紹介をして本題に入ったため、比較的リラックスした状態で意見を述べることが出来ました。ワークショップでお話をしてくださった方は、研究職の良さや好きなところは、コンセプトを決める→アイデアを出す→シミュレーションをする→製品に展開するといったAIには決してマネすることが出来ない一連の流れを成し遂げたときだとおっしゃっていて、かっこいいなと思いました。」(高2)

「ワークショップでは、自分の意見を聞いてもらったうえで専門家からのアドバイスをもらえたり、ほかの探究の班がしている取り組みや考え方も共有できたりして、自分の活動にも生かせるところがあるなと感じた。うちの父も以前の職場が三菱の造船部門であったため、訪問した日の夕食の際に行き学んだことや見学した場所について二人で話し、話がよくお互いに通じて楽しい時間とすることができてとてもよかった。またこのように興味の沸く取り組みがあればぜひ申し込んで参加してみたい。」(高2)

「今回のワークショップで、私が一番感じたことは、何か一つの問題を解決するとしても、その問題が起こるまでにはいろいろな事柄が関係しているため、初めから一つの課題を見つめるのではなく、様々な視点から、広くその問題をとらえて、いろいろな人の立場から解決策を模索することが重要だということである。今回のFWで得た知見を今後の探究活動に生かしていきたい。」(高2)

「施設見学では、カーボンニュートラルやクリーンエネルギーの促進が叫ばれている現在、その有効なエネルギー源の一つとしてよく言われている水素だが、製造方法が3パターンもあり、それぞれに長所短所があることがわかって面白かった。また説明された内容が「化学」の内容を色濃く残した内容で、普段何気なく・どうしてという思いをもって学んでいたが、このような形で将来生かすことがあるのかもしれないという、日々の勉強へのモチベーションになった。」(高2)

「今回のワークショップは元々探究のフィールドワークという名目で参加したものだったが、化学が好きな私からすると夢のような時間であり、化学基礎の内容から習っていない応用の部分までが利用された施設を見ることができ、学びの意欲が高まったとともに、とても興味深い内容を直接見て感じて聞くことができる大変貴重な機会であったと思う。私は将来化学にまつわる、関連した仕事につきたいと考えていて、現在は教員になろうと考えているが、今回の見学で、研究員も一つの道であることができ、探究だけでなく進路の観点でも行ってよかったと思えるワークショップだった。」(高2)

三菱重工のみなさま、本プログラムに際しまして、この度は大変にお世話になりました。本当にありがとうございます。生徒たちが世界で活躍する人材として育つため、基盤となる力を育む大変貴重な研修となりました。

三菱みらい育成財団のみなさま、あたたかいご支援とご激励を、いつも本当にありがとうございます。生徒たちにとって、生涯忘れられない時間となりました。今後とも何卒ご指導、ご鞭撻の程、よろしくお願いいたします。

4 長崎大学との協働

1 探究基調講演会（経済学部 山口 純哉先生）

5月23日（木）、長崎大学経済学部准教授の山口純哉先生による「探究基調講演会」をおこないました。山口先生は、地域経済学がご専門です。阪神淡路大震災の復興調査に参加され、地域社会の持続に興味を持たれ、地域経済学を専門とされました。長崎の地域課題について、グローバルで多様な視点からアプローチされるお話は大変興味深く、探究活動への学びの意欲を喚起します。

また、先生は長崎県地域限定通訳案内士試験のテキストを監修されたり、テレビなどメディアに出演されたりと、長崎の魅力を生かして社会に発信しており、多方面で活躍されています。長崎県民にはおなじみの素敵な先生です。

今回は、高校1年生を対象に、講演会、また希望者による座談会という構成で実施しました。

講演会では、「ともによき世を創るために～探究活動はじめの一步～」と題し、先生のこれまでの研究内容や、探究活動をおこなううえでのプロセス、テーマ設定の手法、課題の実例などをお話いただき、まさに探究活動の基礎となる学びの決定版ともいえる内容で、生徒の学ぶ意欲が強く喚起されました。特に、探究の学びのプロセスが本校の学校設定目標である「WWL7（①課題発見・解決力 ②創造力 ③情報分析・活用力 ④自己表現力 ⑤協働性 ⑥学ぶ意欲 ⑦地球市民性）」につながることを強調され、本校の目指すべき人材像との一致に、生徒達も納得を得ながら講演に聴き入っていたようです。生徒の感想を下記に抜粋いたします。

「理想と現実の差の問題を考えることが、問題解決プロセスにとって重要なことだと分かりました。また、その問題解決プロセスがWWL7と繋がっていることを知ることができ、意義を感じました。」

「自分が固定概念にとらわれすぎていたことに気付いた。魚を描く例を紹介いただいたが、日本人ならではの左向きの魚の絵を書いてしまい、普段の自分の経験から、魚は左向きである、という考えが染みついていた。また、WWL7の中での情報分析・活用力が必要であることを実感した。」

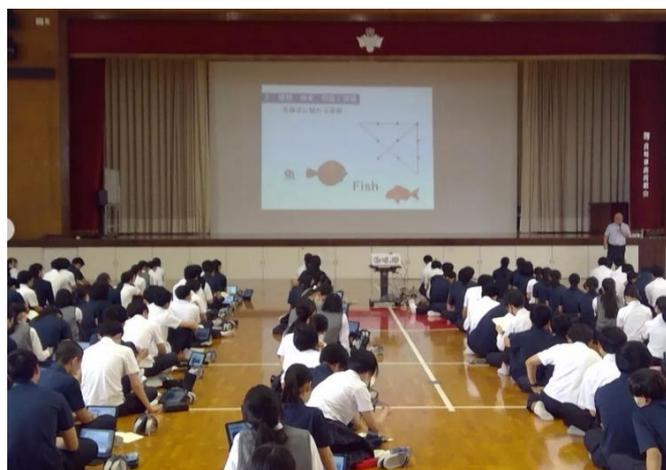
「探究テーマの設定をする上での三つの視点(what, how, why)などわかりやすく説明されていて、今後、探究をしていくうえでとても参考となるものばかりでした。」

「社会を変えたいと思い、子どもたちに良い教育をするために大学で働いていらっしゃるということに、感銘を受けた。税金や自然災害、障害など様々な問題に向き合い、社会のことを考えている山口先生は本当にすごいと思った。」

やはり、一流の先生の一流の講義に触れることが、生徒の向上心、心のエンジンに火をつけることを実感した講演会となりました。講演会後の座談会では、希望者約30名が参加しました。どんな質問にも丁寧に、そして学問的な深さと面白さに満ちた解答をいただき、生徒の学びはさらに深まりました。

ある生徒からは、「地震などの災害についてですが、実際は予測と違うところで地震が起きていて、その予見というのはかなり難しいようです。先生は災害と経済学について研究されてきたとお聞きしましたが、この状況をどう捉えていらっしゃいますか」との質問がありました。それに対し、先生は「減災の必要性を強調。災害は必ずどこでも起きる、という意識を持つことが重要であり、起こったときに、すべきことがわかれば慌てない。日本は欧米諸国と違い、備蓄をあまりしていないことに言及され、意識の啓発についてお話がありました。

「実験や調査などが行いにくい内容について、探究を調べ学習で終わらないようにするにはどうすればよいか」という質問に対しては、「論理性」と「共感性」の重要性を強調。研究と違い、仮説の検証というものにこだわらなくても、探究内容に根拠としての「論理性」があるか、また、探究内容が自分以外の人に納得感のある「共感」を得るものではあるか、という点が探究では評価される」というお話がありました。探究で大切なことは、仮説どおりうまくいった、ということではなく、やったけど、結果が出なかった、ということに気付くことができたこと自体が結



↑山口先生の探究基調講演会

果であり、その観点が大切である、というお話を受け、探究をこれから行う1年生は、安心感とともに挑戦への意欲を喚起していました。

また、「自分の分野から一番遠い人やモノと触れ合うことが、イノベーションを行う上では大切である」というお話がありました。例えば休日に美術館に行ったり、映画を観たり、またはニュースを毎日見るだけでもいい。自分の専門分野から遠いところにヒントがあることが多い。アインシュタインは、「常識とは18歳までの経験に基づくもの」という言葉を残しました。自分というものはもっておいてよい、ただ、意識を変えずに、習慣を変えて、楽しみながら色々なことにチャレンジすることの必要性について、お話をいただきました。



↑ 座談会での、活発な質疑応答

美術系の進路を考えている生徒からは、「アートと経済学とのつながり」について質問がありました。先生は、岩手県でアートブランド事業を手がける企業「ハラルポニー」で、まさに芸術的な障害者のアートが高い利益を生んでいることを紹介しました。いまの時代、マーケットは世界に広がっており、長崎で売れなかったとしても、他の地域や国では売れるかもしれない。希望をもって芸術活動に取り組むよう、生徒に激励を贈りました。

とても優しく、希望に満ちた楽しい座談会は大盛況のうちに終了しました。山口先生、たくさんの貴重な学びの機会をいただき、本当にありがとうございました。何よりも生徒たちは、先生の慈愛に満ちたお話に勇気と希望をいただきました。これからも長崎東を、何卒よろしく願いいたします。

② 長崎大学との協働探究

今年度、長崎県教育委員会主催で「長崎大学との協働」企画が行われています。これは長崎県内の高校生の探究活動を長崎大学の先生方からサポートをいただき実施するもので、年間をかけたの取組となります。県内各校の代表チームが長崎大学の先生方と協働し探究を進めます。そして3月15日(土)には県内の高校生が長崎大学に集まり、探究成果発表会を行います。本校は、本発表会の大会運営に関わっています。

9月12日(木)には、「ペロプスカイト太陽光電池を用いた二酸化炭素削減」について探究している代表チームが、長崎大学教育学部教授の藤本登先生とオンラインで初回の質疑応答を行いました。太陽光の課題やその活用法について詳細な講評をいただき、問いを深めることができました。

10月15日(火)には、「行動経済学を用いたエコツーリズムの促進による長崎県の人口増加」について探究しているチームが、長崎大学経済学部准教授の山口純哉先生の研究室をご訪問しました。地域経済について最前線で研究されている山口先生に、長崎県が直面している現実的な課題や、持続可能性について教えていただき、生徒たちの探究活動の方向性が見えてきました。

10月29日(火)には、「長崎市の空き家・空き地における植樹活動」について探究しているチームが、長崎大学環境科学部准教授の山口真弘先生の研究室をご訪問しました。山口先生に、専門的な見地をから「生態系サービス」をつくる弊害を踏まえ、生徒の問いに丁寧にお答えいただき、探究の方向性を深く考える契機となりました。

上記を含め、年間を通して先生方に各チームはご指導をいただき、探究を続けています。先生方、ご多用なかのご指導、ご教授、本当にありがとうございます。様々にお世話をおかけいたしますが、引き続き何卒よろしく願いいたします。



↑ 山口真弘先生の研究室ご訪問

5 主体性を高める教育活動

1 東志行（新入生研修）

4月10日（水）～2日（金）、本校の新高校1年生（79回生）研修、通称「東志行（とうしこう）」が行われました。3日間の大きなテーマ活動として、「WWL7研修」を実施しました。

本校は文部科学省より、イノベティブなグローバル人材の育成を目指す「WWL（ワールドワイドラーニング）拠点校」に指定されており、その人材になるために育む力を7つ設定しています。

すなわち、①課題発見・解決力、②創造力、③情報分析・活用力、④自己表現力、⑤協働性、⑥学ぶ意欲、⑦地球市民性の7つであり、これを「WWL7」と呼称しています。

今回の研修では、1日目にまずWWL7について、どういった力なのかを講義を受け理解を深めます。2日目にはチームで特に高めたいWWL7を3つ選び、その後、あえてWWL7のうち1つを別の力に置き換える、という活動を行います。大切なWWL7をあえて他のものに置き換えるのは、その過程で自分たちが特に高めるべきWWL7が何なのかを比較・選択し、考えを深めることに繋がるからです。こういった研修では、学校の目指すべき理念を理解するために、どうしてもトップダウンの形になってしまいがちですが、少しでも能動的に、楽しみながら研修に励めるよう、新たな力を「創る」というボトムアップの方式をとります。生徒たちからは、「笑顔力」や「enjoy力」などユニークなものや、「忍耐力」「コミュニケーション力」などの新たな力のアイデアが続々と登場。「継続力」を考案したチームからは、その理由として、「WWL7のような立派な力があっても、イベントなど特別なときだけ発揮しても意味がない。続けてこそ意味がある」とあり、「なるほど！」と教員側がうなりました。

そして3日目、最終日には、「WWL7が実現した状態」をイメージした写真スライドをクラスごとに1枚作成し、自己表現を行う、という取組を行いました。全クラスが創造力に満ちた素晴らしい発表で、新入生としての決意と明るさ、美しさに溢れたものでした。「ともによき世を創る」79回生一人ひとりが、美しく、素晴らしい。師弟同行、これからの3年間、ともに育ち、ともに輝く、最高の時間にしていくことを決意する素晴らしい期間になりました。



↑創造力溢れる決意に満ちた発表

2 海外研修ワークショップ

5月2日（木）、海外研修ワークショップを行いました。今年3月、4月に実施した、ニューヨーク、ハワイ、オランダの海外研修と、日本の公立校で唯一招かれたアメリカモンレーの国際会議CIF（クリティカル・イシューズ・フォーラム）に参加した高3生徒9名が、パネルディスカッションの形式で研修内容について報告を行い、その後、生徒のファシリテートのもと、会場全体を巻き込みワークショップを展開しました。

ハワイを訪れた高3の松川渚紗は、「日本に原爆が落とされた一方、旧日本軍が真珠湾を攻撃したという、被害と加害の両方の視点を持つことができた。平和構築のためには、歴史を批判的思考で捉えることが大切」と報告。参観した生徒からは、「訪れたからこそわかること、想像できることがたくさんあるので何を学習するにしても勉強して現地を訪れることが大事なのかなと思った」との感想がありました。先輩たちの活躍を見て、海外研修への憧れを抱いた生徒も多かったです。

その後、グローバル人材に求められる資質についてのワークショップを行い、フロアからも質問や意見が続出。生徒が共に高めあう素敵な時間になりました。



↑代表生徒と会場生徒が共に協議

③ 探究ピア・サポート

本校では、「探究ピア・サポート」と題し、上級生から下級生に探究活動の支援を行う取組を行っています。先輩から後輩に、探究においてうまくいったことだけでなく、うまくいかなかったことや、その時どのような工夫をしたのか、対話しながら説明を行います。本校の探究活動を継承し、深化させるための取り組みです。今年度は、中1から高2まで、すべての学年を高3がサポートしました。

例えば6月13日（木）には、中学1・2年生の平和学習の発表を高3が聴き、アドバイスをを行いました。緊張気味の中学生でしたが、先輩を前に堂々と発表ができました。高校3年生も、中学生の発表の良いところを見つけてあげよう、探究を良い方向に導こうという気持ちで、真剣に発表を聞いていました。中学生と高校生が同じ教室で学び合う。中高一貫校の本校ならではの取り組みです。

7月4日（木）には、高校で初めて探究を行う高1を対象に実施しました。自らの経験を踏まえ、「探究テーマ設定のポイント」や、「チームで協力することの大切さ」、「探究を通して成長したこと」などなど、熱く、丁寧に説明しました。具体例として先輩の探究内容についても披露。後輩たちは頼もしい先輩たちのアドバイスに聴き入っていました。積極的に質問する後輩たちにも、優しく丁寧に答える高3生は、「頼もしい」の一言。本校の探究文化を生徒自ら伝統化していくカッコいい姿を見せてくれました。



↑先輩の探究の経験談に聴き入る後輩たち

④ 東京大学 片山実咲様との協働

(1) 本校生徒との対話会

7月20日（土）、東京大学大学院情報学環・学際情報学府の片山実咲様と本校生徒の対話会を行いました。

片山様は、同大学院准教授の渡邊秀徳先生の研究室に所属され、「テクノロジーを活用した戦災記憶の継承と平和学習の開発/検証」をテーマに、デジタルツインやメタバースなどの平和教育への活用について研究されています。また、高校時代から核兵器廃絶を求める署名活動や被爆体験の伝承活動に従事し、これまで国連軍縮会議やNPT再検討会議など、様々な国際会議に参加。2024年には、UNODA（国連軍縮部）によるYouth Leader Fund for a World without Nuclear Weaponsの世界の100名に選出されています。



↑片山実咲様

さらにはMicrosoftに勤務されており、「大学院・国連活動・企業」と、多方面で活躍されています。対話会には、平和系の探究活動を行っている高2生徒が主に参加。実社会で活躍される憧れの大先輩から学びました。

核兵器廃絶の大切さを全国に広げていくためにはどうしたらよいかという質問に対して、片山様は、核兵器廃絶へ向けて動いていくことが、それによって具体的に社会がどうよくなるのかを、方向性、段階、論拠、分類など、客観的に証明できるようにしていくことが必要。それを周囲から必ず求められる。特に、長崎・広島若者には、現地で育った者として求められていると、論理性の大切さについて、ご回答をいただきました。

オランダに海外研修に行った生徒からは、長崎の高校生は原爆投下の真相を広げていこうという意識が強い傾向があるが、ヨーロッパの高校生とアウシュビッツを訪れたとき、広げていこう、知ってもらいたい、という意志をあまり感じなかった、という違和感について質問がありました。それに対し片山様は、当事者意識の違いについて言及。「悲惨な意識」の捉え方について、例えばヨーロッパにおいては、民族性を重んじ、アウシュビッツの凄惨な歴史をユダヤ系として残していく、という民族における責務とする傾向がある。他者に広げていくもの、よりも、自民

族に継承していくもの、という違いがある、とのご回答をいただきました。

また、キャリアについて、研究と仕事は1つしか選べないかどうか、という質問に対しては、企業間の最速の動きに、研究機関である大学は追いついていない。それ位競争がすごく激しいのが現場である。だからこそ、企業に勤めながら大学で学べば、最先端の状況を知り得ながら研究ができる。これは大きなメリットになる。自分のブランディング(市場価値)のために、どういう要素が必要か、ということを考えることも大切である、とのご回答をいただきました。片山様ご自身が、研究者・企業人・国連参加という3つのアイデンティティ、3つの強みをお持ちであり、だからこそその一流のご活躍をされていることに、生徒たちは生き方の一つのモデルに触れることができました。

人と違う場所をつきつめていけば、自分しかできない場所にたどり着ける。ゆるぎない自分になれる。生徒たちの人生において、大変に大きな示唆を与えていただきました。

(2) 生徒主体のキャリア・セミナー

11月7日(木)、片山様をお迎えし、キャリア・セミナー「未来をデザインする～キャリアを創るという選択～」を開催しました。本セミナーの準備、運営、進行は、すべて実行委員をはじめとした本校生徒が務めました。

まず片山様からご自身のキャリア選択についてのご経験から、「大学院・国連活動・企業」という3つの柱のもとご自身のブランディングを行っていることに触れ、生徒はキャリアの形を学びます。そのうえで、代表生徒を交えたパネルディスカッションを実施。会場の生徒からの質問を受け付けながら、会場一体型の進行を行っていきました。進路や学校生活に対する生徒の悩みに、片山様はご自身の経験も踏まえて丁寧にお答えいただきました。

その後、希望者との座談会を実施。生徒は、憧れの大先輩から学ぶセミナーを主体的に運営し、充実した一日となりました。片山様、ご多用ななか、この度は本当にありがとうございました。



↑片山実咲様とのパネルディスカッション

6 産官学連携ワークショップ「MIRA-GE」

一般社団法人エッジソン・マネジメント協会が主催する産官学連携ワークショップ「MIRA-GE」に、長崎県の代表校として本校は唯一招聘を受けており、現在、大会の開催に参加しています。

この事業は「未来リーダー」を育成する教育プログラムです。日比谷高校や九段中等教育学校、天王寺高校、広尾高校、また日立やパナソニック、ハウステンボス、京セラ、大阪大学や一橋大学、長崎大学、長崎県立大学などが参加し、「未来」についてどのようなアクションを起こしていくかを「フラット」な立場で協議し、参加者のリーダー性を育成します。

今年度は10月26日(土)に東京、12月14日(土)に大阪、12月26日(木)に京都で開催され、本校の高1、2代表生徒が参加しました。3月8日(土)には本校で長崎大会が開催され、本校生徒が運営に関わります。次年度は8月には長崎で全国の代表校を集めてより大規模な開催が企画されています。生徒の成長の大きな契機となる予定です。下記、東京大会に参加した生徒の感想を記載します。



↑MIRA-GE 東京大会の様子

【感想 高1 北村 はなこ】

私は「MIRA-GE」で何か学べるのだろうか、という疑問が代表に選ばれたときから、頭の中を駆け巡っていた。なぜなら、私自身にもすごい知識や技術はない、いわゆるそこら辺にいる高校生だ。しかし、MIRA-GEに集まるのは日比谷高校や九段中等教育学校など、誰もが聞いたことあるような超名門校の生徒たちでそこに社会人や大学生も集まると聞いたとき、私は何もできないのではないかと正直なところ思っていた。東京に行く前日には緊張でなかなか寝付けなかった。

しかし、振り返ってみると、本当に参加してよかったと感じた。ここで感じたことは大きく分けて3個ある。

1つ目は、生きていることが知識だということだ。知識というとテストで出てくるようなものばかりを想像しがちだが、今私が触れているもの、体験したこと、学校までの道のりや今日食べたものまで知識となりうるのだ。このことをMIRA-GEで強く感じた。後々、考えてみるとその理由はMIRA-GEのグループワークが問題としていたことは私たちの身近な話で、その上、一つのことを根掘り葉掘りしていくからなのだろうという結論に至った。私の心配は杞憂だったのだ。これからの地球を考えていくためには数字やグラフなどのデータももちろん大切だが、今自分がおかれている環境というデータも非常に大切だと感じた。

2つ目は、いろんな世代の人とフラットに話すことの楽しさだ。今まであまり気付かなかったが、世代によって考え方にカタよりがあった。情報源や今までの経験、学んできた知識に違いがあるからなのだろう。私の今回のグループは、ばんどーさん(日立)、まつさん(大阪の教育委員)、いずみさん(九段中等教育学校)、ゆうきさん(大学生)とかなり世代が分かれていた。高校生は直観的で抽象的な意見が多いのに対し、社会人や大学生は俯瞰的で具体的な意見が多かった。そのため、私がかかなり抽象的な意見を出しても、周りの人がどんどん具体的にしてくれて、とても楽しかった。今の世界に足りていないのはこのような話し合う場ではないかと感じた。このような機会がもっと増えればいいなと感じた。

3つ目は物事をいろんな方向から見る楽しさだ。今世界が抱えている問題の解決には、いろんな角度から見る必要がある。例えば、地球温暖化を解決するにはまず排出される温室効果ガスを減らす必要がある。そのために、二酸化炭素が出にくい商品を開発したり、再生可能エネルギーを使ったりと、工学や化学、社会学や経済学などいろんな学問が必要になる。今回のワークショップではいろんな人がいろんな角度から見ることで一つの問題を紐解くのが比較的簡単だったが、今後はもっと少数または一人でやる必要があるかもしれない。そのために、いろんな分野を学んでいかなければならないと感じた。今回はワークショップから凄まじい知識や経験を得ることができたが、Panasonicさんの話もとても興味深かった。特にシアノバクテリアには驚異的な可能性を感じた。技術はかなり進んでいることを具体的な例とともに学ぶことができた。今回のMIRA-GEでの経験は本当に私にとって大きな成長につながった。この成長を周りの人とも分かち合いたいと思う。



↑笑顔が弾ける参加生徒

【感想 高1 森 颯也】

私はこのMIRA-GEの研修で自分の視野をとて広げることができた。MIRA-GEでは年齢や立場関係なく、誰もがフラットな環境で、自分の話したいことがためらわずに発言できた。

Panasonicさんの万博で紹介する予定の最新技術を紹介していただいた。藻やこけで二酸化炭素を酸素にし、光合成を効率よく行うシアノバクテリアや、発電するガラスペロブスカイト太陽電池など、未来社会をつくっていく上で重要な技術を知ることができた。その技術をもとにワークショップでは、私たちのグループは都市部における自然との共存というテーマで話し合った。話し合う中で、大人たちは自分の知っている知識や技術を若者に伝え、若者は

その技術や知識をどのように応用すれば良いのか考えるというサイクルが誕生した。1つの問題を解決するとまた新たな問いが発生して、また解決しての繰り返しで、とても楽しかった。その後、ワークショップに参加した学生たちでディナーに行き、より深く交流を深めることができた。

2日目は東京都内で自主研修を行った。私たちは第五福竜丸記念館を訪れ、教科書に載ってない物理的な視点や社会的な視点で核兵器について学んだ。その後、台場公園に行き、江戸末期のペリー来航時代の東京のことを歴史的な視点や、地理的な視点で学んだ。当時の大砲をARで再現したものが設置されており、自分たちが今取り組んでいるメタバースに関する探究学習に生かすことができた。また日本科学未来館を訪れ、ロボットなどの最新技術を体験することができた。その際、大学生の探究全国大会がっており、私たちに探究発表を詳しく分かりやすく説明して頂き、とても学びになり、大きな学びになった。この研修は自分たちだけが学ぶだけで終わりではなく、学校のみならず伝えるまでがこの研修だと思うので、学校でも学んだことを皆に共有していく。

【感想 高1 山中 美葉】

1日目はこの研修のメインである、ワークショップに参加しました。今回のワークショップでは、参加団体の一つであるPanasonicさんの技術がいくつか紹介されていました。例えば、植物の成長を促進する「シアノバクテリア」や、発光生物を照明として使用する「バイオライト」などがありました。これらの技術は全て環境に配慮されていたり、自然の力を使ったりしている技術であったため、「技術と環境の共存」というテーマで会議を進めることになりました。会議では、班員それぞれが学生や教師、会社員など年齢や立場が異なりましたが、お互いがお互いを尊重し、自分の意見を臆せずに発することが出来る雰囲気がつくられていました。それによって、それぞれの立場から多様な意見が得られ、会議を豊かなものにできたのではないかと考えます。1人で考えていたら気づけなかったかもしれない意見を知ることが出来て、改めて会議の重要性を認識しました。また、今回の会議で自身の知識不足や発言の内容の構成力など、より良い会議をするために足りていないものを知ることが出来ました。このワークショップで学んだことや感じたことを次の経験に繋げて行けるように努力したいです。

2日目は、東京研修を行い、午前は第五福竜丸展示館と台場公園に行きました。第五福竜丸展示館では、実物の第五福竜丸を見ることが出来ました。また、第五福竜丸の被爆の経緯や日本全体への影響なども詳しく解説をいただきました。台場公園では、江戸時代に造られた陣屋や弾薬庫、そして砲台などの跡を見ることができ、歴史や時代を感じられました。午後には日本科学未来館に行きました。そこではロボットの技術の進化を見たり、大学生の探究を見学したりしました。クラスメイトの探求に関わっていそうなものがあったので、共有しようと思います。今回の経験で成長できるのが実際に参加した私たち3人だけでなく、学校の全員になれるよう行動していきたいです。

【MIRA-GE 報告会】

11月6日(水)、「MIRA-GE」東京大会に参加した高1の代表3名が報告会を実施しました。本大会は3月8日(土)に長崎県大会を本校で実施することとしており、本校の生徒が運営に関わることになっています。

東京大会に参加した森颯也は、「社会課題に対して、大人の方の知恵や最新の技術をもとに、学生たちが解決策を講じるサイクルを、自然に体験できた」まさに、探究のサイクルを体験するワークショップであったことを強調。また、「仲間」ができたことの喜びを実感していました。

代表生徒の報告を受け、参観生徒は驚きの声を上げ、長崎大会、また来年度実施を予定されている全国大会への参加に向け、意欲を燃やしていました。生徒の活躍にご期待ください。↑ワークショップの価値について報告する代表生徒

